

# 狐塚遺跡

——前宮公園建設工事に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

1990

茅野市教育委員会

# 狐塚遺跡

——前宮公園建設工事に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

1990

茅野市教育委員会

## 序 文

狐塚遺跡は、昭和56年に前宮公園の建設に伴って発掘調査が行われました。本書はその発掘調査報告書であります。

狐塚遺跡は前宮と高部を画する火燈川、あるいは火燒山と呼ばれる尾根の先端の丘陵上にあります。この丘陵の東側の扇状地は諏訪大社上社前宮が鎮座し、諏訪明神発祥の地としてたいへんに由緒深い場所であります。

また、丘陵西側の高部の地域は、前宮の場所と同様に、西山地域における原始・古代から続く最大級の遺跡地であるばかりでなく、諏訪神社にゆかりの深い史跡の豊富な土地であります。このような歴史的環境の中に位置する狐塚遺跡の丘陵は、峰<sup>ミツノタケヌ</sup>溝<sup>カニ</sup>の木があり、かつては大祝道が通っていたともいわれる場所であります。注目されるのは、そのような前宮に関係深い場所に、狐塚古墳と呼ばれる、諏訪地方では古式の古墳が存在するといわれてきたことであります。

発掘調査では、期待どおり5世紀の古式の古墳が明らかになり、亦平安時代の3基の土壙墓も発掘されました。それらの詳細については本書に記されていますが、この場所が古代の墓域であったことが明らかになったことは1つの大きな成果であります。前宮や高部に隣接する場所の発掘調査であっただけに、本書に収められた発掘調査の成果は、これから諏訪地方の古代史を研究する上に欠くことのできない貴重な資料となるものと思われます。本書が多くの人々に広く活用されることを願っております。

終りに、発掘調査および遺物整理、そして報告書の作成等、長年に渡ってご尽力いただきました調査団はじめ関係者の方々に深く感謝申し上げる次第であります。

平成2年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 昭二

## 例　　言

- 1、本書は、昭和56年に行われた前宮公園の建設に伴う長野県茅野市狐塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘現場における記録は宮坂光昭・鶴飼幸雄・矢嶋恵美子・関 喜子が行い、写真撮影は宮坂・鶴飼・小松大吉が行った。遺物の整理は宮坂・鶴飼・矢嶋・関・宮坂篤夫・柳平嘉彦が行った。なお、第2号古墳出土土器の復元は牛山武樹氏によるものである。遺物の実測・トレスは守矢昌文、遺構のトレスは鶴飼、遺物の写真撮影と図版の作成は小林深志と伊東みゆきが行い、植松幸子・伊野文子と米山美代子が補佐した。
- 3、本書の原稿は宮坂光昭・鶴飼幸雄・小林深志・守矢昌文の4名で分担執筆した。執筆の分担は次のとおりである。第I・II・III章 鶴飼幸雄、第IV章第1・2節 小林深志、第IV章第3節 守矢昌文、第V章第1節 小林深志、第V章第2節 宮坂光昭
- 4、出土品、諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

## 目　　次

第Ⅰ章 調査経緯.....	1
第1節 発掘調査に至る経過.....	1
第2節 調査日誌.....	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	5
第Ⅲ章 遺　構.....	9
第1節 古墳時代.....	9
1 第1号墳.....	9
2 第2号墳.....	21
3 第1号土坑.....	22
第2節 平安時代.....	23
1 第1号土壙.....	23
2 第3号土壙.....	24
3 第2号土壙.....	26
第Ⅳ章 遺　物.....	33
第1節 古墳時代の土器.....	33
第2節 平安時代の土器.....	43
第3節 鉄製品とその他の遺物.....	49

第V章 考 察	.....	53
第1節 出土遺物について	.....	53
1 古墳時代の土器について	.....	53
2 平安時代の土器について	.....	54
第2節 狐塚遺跡の性格について	.....	55
1 狐塚古墳と諏訪地方の古式古墳	.....	55
2 その他の問題	.....	61

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置 (1/5,000)	.....	6
第2図 発掘区と埴丘の位置 (1/25,000)	.....	7
第3図 周辺の地形と発掘区 (1/600)	.....	8
第4図 第1号古墳 (1/120)	.....	11・12
第5図 第1号古墳の層序 (1/120)	.....	13・14
第6図 第1号古墳遺物出土状態(1) (1/80)	.....	15・16
第7図 第1号古墳遺物出土状態(2) (1/80)	.....	17・18
第8図 第1号古墳遺物出土状態(3) (1/80)	.....	19・20
第9図 第1号土坑 (1/40)	.....	22
第10図 第1号土壤 (1/40)	.....	23
第11図 第1号土壤遺物出土状態 (1/20) (1/4)	.....	24
第12図 第3号土壤 (1/40)	.....	25
第13図 第3号土壤遺物出土状態 (1/20) (1/4)	.....	26
第14図 第2号土壤 (1/40)	.....	28
第15図 第2号土壤遺物出土状態 (1/20) (1/4)	.....	29・30
第16図 狐塚古墳出土土器種別分類 (1/4)	.....	34
第17図 第1号古墳出土土器(1) (1/3)	.....	37
第18図 第1号古墳出土土器(2) (1/3)	.....	38
第19図 第1号古墳出土土器(3) (1/3)	.....	39
第20図 第2号古墳出土土器(1) (1/3)	.....	40
第21図 第2号古墳出土土器(2) (1/3)	.....	41
第22図 第2号古墳出土土器(3) (1/3)	.....	42
第23図 第2号古墳出土土器(4) (1/3)	.....	43
第24図 第1号・第3号土壤出土土器 (1/3)	.....	46
第25図 第2号土壤出土土器(1) (1/3)	.....	47
第26図 第2号土壤出土土器(2) (1/3)	.....	48
第27図 鉄製品(1)と玉類 (1/2)	.....	50

## 図版目次

図版一	遺跡周辺の航空写真中央左に位置する山 脚先端の丘陵上が狐塚遺跡。左の扇状地 には諏訪神社前宮が鎮座する。中央の扇 状地は高部である。	図版十八	1. 第1号土壙発掘状況（西から） 2. 第1号土壙（東から）
図版二	1. 狐塚遺跡の丘陵背後の山は守屋山 2. 高部と守屋山麓の景観中央は相木社	図版十九	1. 第1号土壙北壁側の埴上器 2. 第1号土壙南壁下の埴
図版三	1. 遺跡近景 2. 遺跡近景	図版二十	第2号（右）・3号（左）土壙（南から）
図版四	1. 遺跡からみた諏訪盆地の東南部 2. 遺跡からみた八ヶ岳山麓	図版二十一	第2号土壙（西から）
図版五	1. 第1号墳からみた「峰塔の木」 2. 峰塔付近からみた第1号墳	図版二十二	1. 第2号土壙（西から） 2. 第2号土壙（南から）
図版六	第1号墳全景（東側から）	図版二十三	1. 第2号土壙（東から） 2. 第2号土壙（北から）
図版七	第1号墳全景（南西側から）	図版二十四	第2号土壙遺物出土状態
図版八	第1号墳全景（東北側から）	図版二十五	1. 第2号土壙遺物出土状態 2. 第2号土壙遺物出土状態 3. 第2号土壙遺物出土状態
図版九	1. 第1号墳丘南東部 2. 第1号墳墳丘東部	図版二十六	1. 第2号土壙上面の埴の状態 2. 第2号土壙プランの余景と遺物の出 土状態
図版十	1. 第1号墳墳丘南西部と周溝内の第1 号土坑 2. 第1号墳墳丘西部と段状遺構	図版二十七	1. 第2号土壙小袋の出土状態 2. 第2号土壙板状炭化材出土状態
図版十一	1. 段状遺構（北から） 2. 段状遺構南端部	図版二十八	1. 第3号土壙（西から） 2. 第3号土壙遺物出土状態
図版十二	1. 第1号墳A～E-105列の状況 2. 第1号墳北西コーナー部のトレント の状況	図版二十九	1. 第17図1 2. 第17図2 3. 第17図3 4. 第17図4
図版十三	1. 第1号墳F-108～110北壁セクショ ンの状況 2. 第1号墳西側縫部とF-110・111北 壁セクションの状況	図版三十	5. 第17図5 6. 第17図6 1. 第17図7 2. 第17図8
図版十四	1. 第1号墳東南側周溝内の遺物出土状 態 2. 周溝内の遺物出土状態		3. 第18図1 4. 第18図2 5. 第18図4
図版十五	1. 周溝内の遺物出土状態 2. 周溝内の遺物出土状態	図版三十一	6. 第18図5 1. 第19図1 2. 第19図2
図版十六	1. 周溝内の遺物出土状態 2. 周溝内の遺物出土状態		3. 第19図3 4. 第19図4
図版十七	第1号墳の周溝と第1号土壙（北から）		

- |       |           |       |             |
|-------|-----------|-------|-------------|
|       | 5. 第19図 5 | 図版三十八 | 1. 第25図 9   |
|       | 6. 第19図 6 |       | 2. 第25図10   |
| 図版三十二 | 1. 第18図 6 |       | 3. 第25図11   |
|       | 2. 第18図 7 |       | 4. 第25図12   |
|       | 3. 第20図 1 |       | 5. 第25図13   |
|       | 4. 第20図 2 |       | 6. 第25図14   |
|       | 5. 第20図 3 |       | 7. 第25図15   |
|       | 6. 第20図 4 |       | 8. 第25図16   |
| 図版三十三 | 1. 第20図 5 | 図版三十九 | 1. 第25図17   |
|       | 2. 第21図 4 |       | 2. 第25図18   |
|       | 3. 第21図 5 |       | 3. 第25図19   |
|       | 4. 第21図 6 |       | 4. 第25図20   |
|       | 5. 第21図 7 |       | 5. 第25図21   |
|       | 6. 第21図 9 |       | 6. 第25図22   |
|       | 7. 第21図10 |       | 7. 第25図23   |
|       | 8. 第21図11 |       | 8. 第25図24   |
| 図版三十四 | 1. 第22図 2 | 図版四十  | 1. 第25図25   |
|       | 2. 第22図 4 |       | 2. 第25図26   |
|       | 3. 第22図 6 |       | 3. 第25図27   |
|       | 4. 第22図 7 |       | 4. 第25図28   |
|       | 5. 第22図 8 |       | 5. 第25図29   |
|       | 6. 第23図 1 |       | 6. 第25図30   |
| 図版三十五 | 1. 第24図 1 |       | 7. 第26図 1   |
|       | 2. 第24図 2 |       | 8. 第26図 2   |
|       | 3. 第24図 3 | 図版四十一 | 1. 第26図 3   |
|       | 4. 第24図 4 |       | 2. 第26図 4   |
|       | 5. 第24図 5 |       | 3. 第26図 5・6 |
|       | 6. 第24図 6 |       | 4. 第26図 7   |
| 図版三十六 | 1. 第24図 9 |       | 5. 第26図 8   |
|       | 2. 第24図10 |       | 6. 第26図 9   |
|       | 3. 第24図11 |       | 7. 第26図10   |
|       | 4. 第24図12 |       | 8. 第26図11   |
|       | 5. 第24図13 | 図版四十二 | 1. 第26図12   |
|       | 6. 第24図15 |       | 2. 第26図13   |
| 図版三十七 | 1. 第25図 1 |       | 3. 実中の実測    |
|       | 2. 第25図 2 | 図版四十三 | 1. 発掘調査参加者  |
|       | 3. 第25図 3 |       | 2. 発掘調査風景   |
|       | 4. 第25図 4 |       |             |
|       | 5. 第25図 5 |       |             |
|       | 6. 第25図 6 |       |             |
|       | 7. 第25図 7 |       |             |
|       | 8. 第25図 8 |       |             |

# 第Ⅰ章 調査経緯

## 第1節 発掘調査に至る経過

茅野市は、昭和56年に前宮に隣接する西側の丘陵地に、約15,000m<sup>2</sup>を対象とした、主に運動公園広場を中心とする前宮公園を建設することとした。

この丘陵は、前宮の扇状地と高部の扇状地を画する山脚の先端部にあたる。火燈山とか火焼山と呼ばれている山で、近くには「諏訪上社物忌令之事」に記載のある七木の1つである「峰巒の木」がある。また、付近一帯には帶曲輪が残るともいわれ、かつてはここを大祝道が通っていた。それらのことから、この火燈山の丘陵は、地理的、歴史的にみても前宮と高部との関連が強い、諏訪神社前宮を中心とする諏訪の古代・中世史を考える上に、きわめて重要な場所であるとされてきた。

第二次大戦後、この丘陵上の畠から直刀や土師器、須恵器が出土した。直刀は他の場所に移して埋められたため不明だが、その時出土した完形の土師器堆と須恵器甕の2点は今も大切に保管されている。また、その付近の畠からも勾玉・直刀が出土したことである。丘陵上の土地の小字名には「狐塚」が冠せられており、それらの遺物が出土したとされている場所は「狐塚道西」の小字名がつけられていた。そのようなことから、この丘陵上には墳丘は不明だが、石室を有さない、古式の「狐塚古墳」と呼ばれる古墳が存在するとてきた。古墳のものとの形状は不明で場所もはっきりしないが、遺物の出土したとされている地点が今回の造成予定地内に含まれている。そのため狐塚古墳の実体を明らかにすることを主目的とする発掘調査が行われることになった。

発掘調査は茅野市教育委員会が調査主体となり、昭和56年10月27日から12月2日まで、約1,300m<sup>2</sup>を対象として行われた。

### ○調査団

調査団長 宮坂光昭 日本考古学協会員

調査員 鵜飼幸雄 尖石考古館学芸員

補助員 矢嶋恵美子 長野県考古学会員

関 喜子 "

調査参加者 守矢芳夫、原田伸六、両角由吉、藤森正文、田中文六、田村和幸、矢崎つな子、藤森みづ子、両角菊子、原 とめ、牛山菊子、牛山たまえ、牛山てる、牛山やす子、牛山みえ、藤森 京、小林しま子、小林 幸、牛山ます、牛山けさみ

### ○事務局

事務局長 小島与四男（教育長） 事務局課長 河西保明（社会教育課長）

事務局係長 竹村 弘（社会教育係長） 事務局員 橋口公男（文化財係）

## 第2節 調査日誌

10月9日 発掘区周辺の地形測量を行う。測量は、完形の土師器壇と須恵器壘等が出土したといわれる1059番と直刀等が出土したといわれる1055・1056番の上下3枚の壇を中心に行う。東側を除く3方向を立木で囲まれているため、測量は立木間をぬって行った。

10月27日 午前中をかけて機材を山上まで運び上げる。機材を運んだ後、現地形の写真撮影を行う。午後からはグリッドを設定し、直刀が出土したといわれる地点のF列から発掘調査にとりかかる。浅く擾乱の激しい耕作土中から直刀の残片と思われるものや須恵器の小片等がわずかに出土した。

10月28日 午前中にプレハブを設置する。E・F-1に周溝らしき造構を発見。覆土中と底部付近より赤色の土師器が出土する。このため溝にベルトを残して周辺を広げる。

10月30日 D・E・F-1を中心に検出されている溝状造構のプラン追求のため、D-0・2、C-1・2を発掘する。溝内からは細かな土器片が集中して出土し、特にC・D-1では折り重なるような状態で出土している。D-0では上器の出土は散発的であったが鉄片が出土した。D-0では溝底が雨潤へ徐々に高くなっていくようである。

10月31日 溝状造構のプラン確認のためB-1・2、C・E・F-0、G-1を発掘する。これにより、溝は下段の壇の土手の部分で深く削り取られていることが判明する。しかしそれが別の造構であるのかは、深い位置にあって発掘できず、その性格については追求できなかった。また、B-9、E-10、H-11、I-12は造構の存在を想定して設定したが、耕作による擾乱が著しく、かつ

遺物もごく少ない。このため下段の壇は今日で調査を終え、午後からは土師器・須恵器の出土したといわれる上の段の壇にとりかかる。

11月1日 E-0の東側に壇と思われる同一個体分の破片が出土し、F-0の東側にも同一個体分と思われる小片が集中している。それらのことから、溝状造構を周溝とする本体が西側の松林となっている1037番の小丘状の地形にあるらしいことが予測される。このためその部分の立木を伐採してグリッドを延長し、部分的に発掘を進める。

11月3日 昨日発見した糸切底の環を伴う落ち込み内から完形の灰釉壘が出土する。この造構を第1号土壙とする。

11月4日 102・103・104列は墳頂部と思われるやや高い地形に位置するため、生体部の存在を想定して発掘を進めたが、E-103の褐色土中より繩文土器の小片が2点出土したのみで、周辺に造構は存在しないものと思われる。土器が出土したといわれる区域のG・H・I・J・K・L-9のうち、J-9の耕作土から釘・鐵錐等が出土する。

11月5日 I・J・K-7、I-8、G-104、H-100・101、I・J-101を発掘する。H-101西南部に遺物の集中する個所があり、遺存する土器の中には小上器片が重なったり、高壙の脚が接合するものもある。

11月7日 周溝プランの確認と遺物の集中個所の範囲を明確にするためG-101、H・I・J-102を発掘する。その他I・K-5、J・K・L-7、J-8を発掘する。

11月8日 立木の伐採と地形測量を行う。J-102の壁際で、底より10cmほどの高さから完形の壇が出土する。地元の人から、第二次大戦中にE-3あたりに1尺5分ほどの刀4本が立っており、

E-0あたりからも1本出土したこと、それらの遺物は宮川小学校にいた先生がもっていったという話を聞く。

11月9日 朝霜柱の掃除をする。水道が凍って飲料水に困る、終日相当に寒い1日であった。西山のため日照時間が短かく、毎朝霜柱の掃除が日課となるというように発掘作業の条件が悪くなる。C-H-0の西壁とI-100の東壁セクションの写真と実測図の作成。K-102の発掘と、F-G-100に残したベルトを取り外す作業を行う。

11月10日 朝霜柱の掃除。D-100・101、E-100・101を発掘する。これにより周辺のプランが西北方向へ丸く渋曲して行くことが判明する。また、G-100に集中する遺物は高壙と堆で、指先大小の小片も多い。H-101の遺物集中個所もこれと似た出土状態を示していた。

11月11日 朝霜柱の掃除。主体部を確認するためD-G-105、F-106を発掘する。F-100の一括遺物をとり上げる。先日まで周辺の底面と思われていた土層が取り除け、墳丘の東側裾部が円弧をなしていることが判明する。これによって墳丘の規模が推定され、北部は現地形の山林と畑の段差が墳丘の境となっていることが明らかとなる。

11月12日 朝霜柱の掃除。C-D-E-105を発掘する。第1号土壙の写真と遺物のとり上げ。I-101遺物集中個所の写真と遺物のとり上げ。E-103南壁、F-104・105・106北壁セクションの写真と実測図の作成を行う。南信日日新聞社が取材。

11月13日 F-107・108・109、G-H-105を発掘する。また、墳丘北側の、現在の段についている墳丘肩部と思われる部分と、その下に周溝があるとすればそのあり方を追求するため105列をA列あたりまで掘り進む。その結果、墳丘の裾がローム層を切っており、この方向には周溝の設けられていないことが明らかとなる。その他、C・

D-0の遺物集中個所の遺物のとり上げと下部の土壙の掘り下げを行い、墳丘の測量を始める。河西保明社会教育課長、竹村弘社会教育係長、樋口公男主事、市史編纂室の茅野慶次先生来跡する。

11月14日 「発砲注意」の看板を山の登り口に2か所設置する。H-I-103・104・105とF列は墳丘裾まで掘り進む。H-105に発見された落ち込みは主体部を思わせたが、これは擾乱構であることが判明する。また、墳丘西側の裾となるF-111では、墳丘の下に浅い周溝を確認する。その他A-G-105東壁セクションの写真と実測図を作成する。藤森明氏来跡する。

11月15日 F-107~111の北壁セクションの実測図の作成。105列トレーナーの写真。I-J-105東壁セクションの実測図を作成する。

11月16日 午前中発掘区の掃除を行い、午後から小松大古さんに写真撮影をしていただく。9列西壁のセクション図と土壙の断面図を作成する。長野県中央道遺跡調査団長樋口昇一氏来跡する。

11月18日 発掘の完了した部分の測量と土壙の実測を行う。発掘機材の一部を長峰遺跡の現場へ運ぶ。

11月19日 狐塚遺跡の発掘は引き続いて実施し、残りの部分についても今年中に調査を終了させることとなる。このため長峰遺跡より機材の一部を再度運び込む。I-103・104の発掘と発掘区の測量を行う。

11月20日 本日から来春に延ばす予定の作業にとりかかる。J-103・104、K-103・104・105、L-103・104・105を発掘する。J-103に人頭大の礫を環状に配した造構を発見し、K-103の黒土中からは勾玉が1点出土した。作業員もふえ、日陰の霜柱も消えるほどの暖かい1日で作業ははかかる。小島教育長、河西課長、竹村係長視察する。藤森明氏来跡する。

11月21日 朝小雨の中作業開始。墳丘南側の周辺のプランと墳丘西側のプランを追求。J・K・L・M-105、F・G・H・I・J・K-106、J・K-107を発掘する。宮坂虎次尖石考古館長視察する。永明小学校齊木孝雄氏、諏訪市教育委員会高見俊樹氏来跡する。

11月22日 墳丘西側のプラン確認作業を行い、墳丘の構が性格不明の長い階段状遺構に切られていることが明らかとなる。また、墳丘西北のコーナー部を確認するため105列とF列の中間にトレーニングを設定する。G-106~110、H-106~109、

I-106~109、L・M-106~107を発掘する。竹内丈夫先生、東京都埋蔵文化財センター小林深志氏、明治大学院生三上徹也氏来跡する。

11月23日 2号土壤周辺の精査と3号土壤の掘り下げ、及びJ~M-105列東壁セクションの写真と実測図を作成する。午後1時から茅野市郷土研究会主催による現地説明会が開かれる。若干の資料を用意し、調査団長が説明にあたる。参加者は約60名であった。その後曇りから小雨となる。

11月24日 第2・3号土壤上部の集石を精査し、後写真撮影と集石の実測図を作成する。F列と105列の中間のトレーニングの発掘は完了する。

11月25日 第2・3号土壤の掘り下げを行い断面図を作成する。

11月26日 小雨の中作業を開始。第2号土壤の精査と遺物出土状態、及び第3号土壤の写真撮影を行う。小松大吉さん写真撮影のため午後来跡する。細野正夫先生来跡する。

11月28日 第2・3号土壤の写真撮影と遺物出土状態の実測図及び断面図を作成した後遺物を取り上げる。トレーニングのセクション図の作成。

11月29日 終日墳丘のエレベーション図の作成を行う。

11月30日 朝から霜柱を除去して発掘区を清掃し、午後小松大吉さんに写真撮影をしていただく。諏訪市教育委員会の三橋 収氏、高見俊樹氏来跡する。

12月1日 午前中雪。雪の中を6名で、測量と西側の段状遺構のエレベーション図を作成し片付作業に入る。

12月2日 朝10時ころまで雪降りとなって1cm以上積もる。雪の止むのをまって5名で測量の残りとトレーニングのセクション図を作成する作業を行う。午後3時から機材の一部を山から下ろし、本日にて作業を終了する。

## 第II章 遺跡の位置と環境

孤塚遺跡は、JR中央本線茅野駅から西へ約2kmの、高部の火燈山（火燒山とも呼ばれる）の丘陵上にある。火燈山は諏訪地方では一般的に「西山」と呼ばれる山地にあるが、西山は諏訪盆地の西側を画する赤石山脈の北の末端となる守屋山塊の山地である。その諏訪側の斜面には、いわゆるフォッサマグナの西縁となる糸魚川～静岡構造線の断層崖となって急傾斜な地形をなしている。

孤塚遺跡のある丘陵は、そうした守屋山塊から諏訪盆地へ向かって派出した山脚の先端部である。東側の前宮の扇状地と、丘陵西側の高部の扇状地を画する地形をなし、丘陵の末端は直線的な断層崖となって盆地の沖積地へにつきている。丘陵の西側には「三千久保」と呼ばれる狭く深い谷地形が高部側から入っており、丘陵頂部の陵線は、「峰の溝」付近から西側へ曲がって三千久保の谷に沿って伸びている。丘陵上の発掘区付近の標高は818m、丘陵下の盆地の沖積地とは約50mの比高差があり、丘陵上からは諏訪盆地の南東部一帯から八ヶ岳山麓が一望できる。

守屋山麓には諏訪神社が鎮座するが、孤塚遺跡のある丘陵東側の前宮の扇状地は、諏訪明神発祥の地とされる場所である。そのため神原と称される扇状地の中央一帯には前宮本殿など、諏訪神社の重要な神事が行われる社がいくつかある。

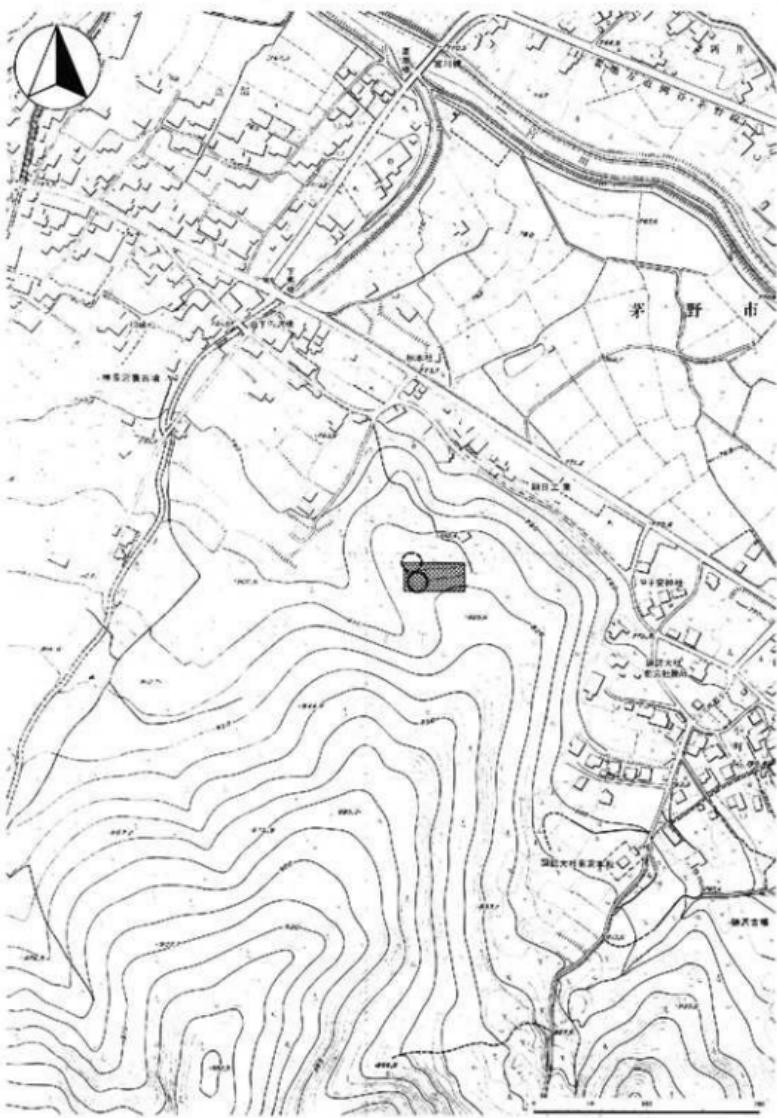
一帯は縄文時代からの遺跡でもあり、特に7世紀から8世紀初頭には古墳群が形成された。このうち前宮本殿の東側に位置する権沢古墳は市の史跡に指定されており、北側の神殿の下段にあった蛇塚古墳からはほぼ完形の金銅裝頭椎大刀が出土している。また、神殿と呼ばれる場所は上社大祝の居館跡として県史跡に指定されている。東側の丘陵上の千沢城（権沢城・安國寺城）は、中世に大祝の據城となった山城で、その主郭部分は市の史跡となっている。

一方の高部の扇状地も遺跡や、特に諏訪神社と関係のある史跡等の豊かな土地である。扇状地の中央部一帯は縄文時代から連綿と続く、西山では最大級の大規模な遺跡である。今までに主として縄文時代中期と後期、及び古墳時代と平安時代の集落の一部が、発掘調査によって明らかにされている。また、扇状地の各所に築造されたいいくつかの古墳は高部の古墳群を形成している。本格的な発掘調査のなされた古墳はないが、それらの年代は7世紀から8世紀初頭と考えられている。このうち神長官裏古墳は市の史跡に指定されている。また、疱瘡神塚古墳はT字形石室をもつ古墳であり、諏訪地方でも類例のない須恵器の子持器台などが発見され、それらは現在東京国立博物館の蔵品となっている。

扇状地の扇端中央部には神長官守矢家邸が位置し、邸内には御頭みさぐじ社が祀られている。その周辺には権祝、擬祝のみさぐじ社が祀られているほか、熊堂には神長官家、権祝家の墓地がある。また、扇状地の扇頂部付近には諏訪の原始信仰と関係のあるとされている小袋石がある。小袋石の下段は磯並社の境内で、境内には穂殿社、玉尾社、瀬社が祀られている。旧磯並社の境



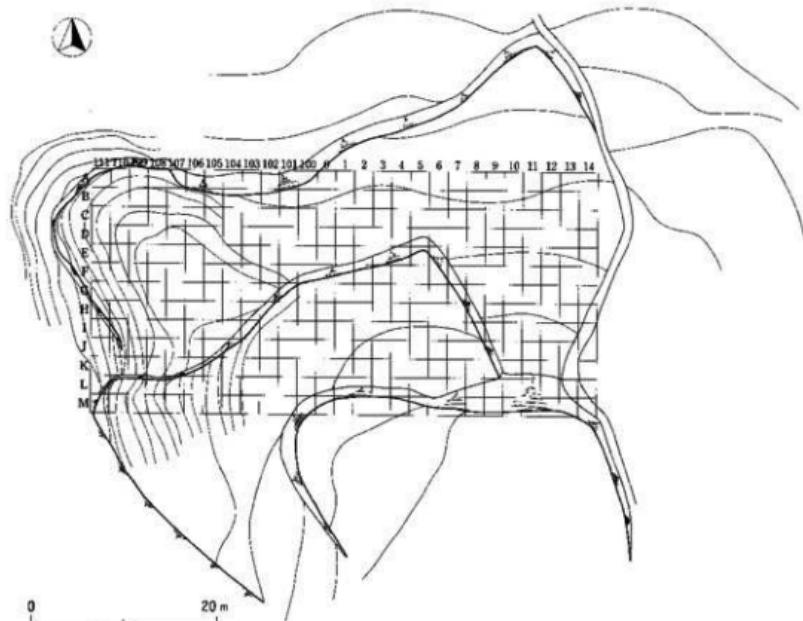
第1図 遺跡の位置 (1/50,000)



第2図 発掘区と墳丘の位置 (1/2,500)

内とみられる場所の発掘調査では、基壇状遺構や建物址と共に、祭祀を行ったとみられる中世のカワラケが多量に発掘されている。付近には磯並山社や神長官守矢家の夏直路の墓地もある。また、高部の扇状地は古東山道の杖突峠の直下に位置しており、扇状地の中央を杖突峠道が通っている。扇状地を横に通る道には大祝道や神袋道などがあったといわれている。

前宮と高部の地形を画する狐塚遺跡のある丘陵は、火燈山、あるいは火焼山とも呼ばれている。丘陵末端の北西側の斜面には帶曲輪の跡があるとされている。また、発掘区に近い丘陵の頂部には、溝の神事が行われた峰湛の木がある。今の峰湛の木は、推定樹齢200余年のイヌザクラの古木で市の天然記念物に指定されており、根本には祠が置かれている。前宮から峰湛の木を経て三千久保の谷へ下って高部に至る大祝道は、今回の発掘区付近を通っていたとされている。



第3図 周辺の地形と発掘区 (1/600)

## 第III章 遺構

### 第1節 古墳時代

#### I 第1号墳

経過 古墳が築造された丘陵で、かつて直刀や土師器等が出土したとされる畠は、下位に位置する本墳に統く尾根状地形を削って造成されたとみられ、厚い耕作土1層で地山面へ至る、方形で台状をなす畠であった。またその下段で、直刀や勾玉が出土したといわれる1055・1056番の2枚の畠は、丘陵頂部の裾となる東側のやや平坦な地形にあり、耕作は地山面へかなり深く達している。古墳はかつて遺物の出土したといわれるそれら上下2段に設けられた畠からは発見されず、やや西側に位置する「三千久保」と称される深い谷地形に沿って北西方向へ尾根状に伸びる、丘陵頂部で小丘状をなしている1037番の山林から発見された。

しかし墳丘の北側下段の山林と畠は発掘できなかった。特に本墳の北東側下段の畠との境で、性格不明の遺構に周辺が切られていることを確認していただけに、調査後の第2号墳の発見と関連し、かえすがえすも残念なことであった。また、南西側の三千久保へ統く斜面は、発掘当時まで使われていた三千久保から登ってくる赤線となっている小道があるため、全体を露出することはできなかった。この小さな山道は、古墳の脇をまっすぐ登れば「峰の道」に至るが、墳丘の南西コーナー部辺で1木が東側へ分かれている。分かれた道は、上段の畠の真下に位置する本墳の周辺の脇を通り、東側を登っている道についている。しかしそれらの道が、「大祝道」といわれる道であるのかはわからない。

墳丘 墳丘の規模は長径22m、短径19mを測る。墳頂中央部のG-105グリッド付近と東側周辺底との比高差は約1.8m、周辺外側の平坦なロームの地山面とは約1mの比高差がある。また、浅い位置に周辺が設けられた南側の周辺底とは約0.7mと比高差が小さい。北側の墳丘裾下とは約2.3m、西側裾下とは1.9mの比高差がある。

墳形は東側から南側が大きな弧状をなして湾曲するのに対し、北側はふくらみが弱くやや直線的である。三千久保の谷へ傾斜する地形をそのまま利用した南西側裾部が階段状の遺構で切られていはいるものの、墳丘の平面形は東西方向に若干長い不整な円形を呈している。

断面形は、平坦な墳頂部から緩やかな角度をなして丸味の少ないやや直線的なラインで裾部に至るが、東側の裾の縁の部分には角がつけられて周辺底へ至っている。墳丘は周辺が浅い位置に設けられた南側では比高差が小さくて低いものの、北側は比高差があつて高い。墳丘の全体は、頂部が平坦でやや低い、土饅頭状の形態をなしている。

傾斜の緩い墳丘南側斜面の中段位には、墳形と周辺に沿うように弧状にめぐる、狭く平坦な帯状をなす面が設けられている。特別な遺物は出土していないが、下段に統く周辺からは土器片が

多く出土しており、何らかの特殊な施設ではないかと推察される。また、西側の墳丘裾部から南側の周溝にかけての部分は、古墳の北西側の下方から伸びてくる、幅狭く長い帯状の平坦面をもつ数段の階段状をなす造構で切られている。この造構の南東端は南側の周溝の位置でとぎれているが、そこは赤線となっている山道が分かれる地点の付近であり、その先端部分は小さな方形の面が数段に段をなし、まさに階段状を呈している。造構の全体を明らかにすることはできず、かつ出土遺物もないため性格は判然としないものの、西下の斜面につけられている山道となにか関連のある、古い時代の造構ではないかと思われる。

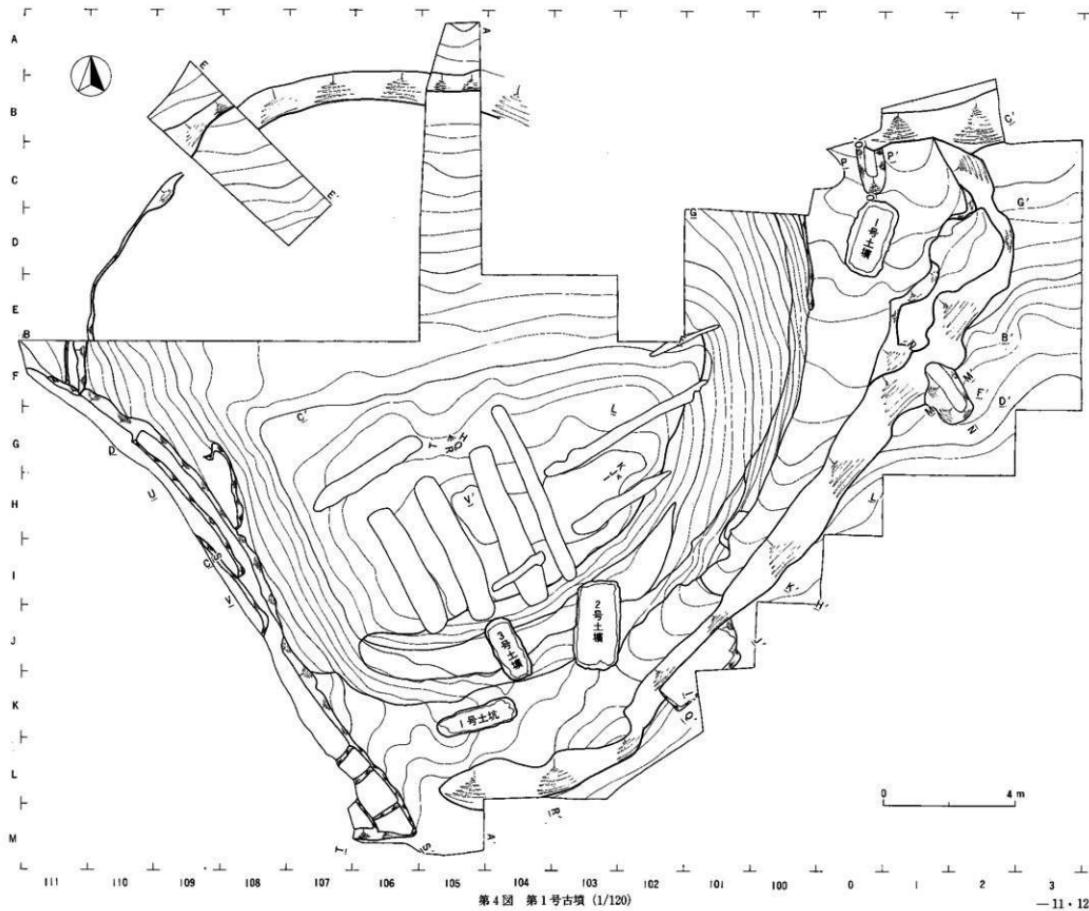
墳丘は北へ向かって傾斜して行く幅の狭い尾根状地形に設けられている。このため墳丘の東、南、西の3方向の斜面となる墳丘の部分は、黄褐色土とその下の地山のローム層を深く削り出してつくっている。一方、地形が傾斜して行く北側の墳丘は、地形を削ってはいるもののローム層への掘り込みは浅い。しかし削った地形の縁となる部分で、築造当時の表土層とみられる黒色土の第13層の上に、裾部を削り出した際に出た黄褐色土やロームブロックを含む第4・5層を低い土手のように盛土し、その内側に第2・3層などの数層を徐々に重ねることでつくられている。盛土は墳頂部にもわずかに認められることから、墳丘は全体に盛土されていたと考えられる。また、墳丘には土留用の礎や葺石などの礎はまったく認められない。礎はわずかに数点の人頭大の礎が東南部の周溝内に検出されただけであった。

周溝 周溝は主として墳丘の東側から南側に尾根状地形を切る形で設けられている。西側でも周溝とみられる狭く浅い溝が検出されているものの、地形が低くなつて行く北側には設けられていない。東北のコーナー部は下段の造構に切られているが、深い位置にあって追求できず、その性格はわからなかった。また、東北のコーナー部の墳丘裾下には小さな溝がある。同じコーナー部の周溝の中央には、第1号土壙付近から北側へ伸びる溝も設けられている。一方の西南部は、墳丘が谷へ向かう斜面へ続く地形となるため、周溝はおそらく全周していないものと考えられる。南側周溝から階段状造構にかけての部分では、地山がローム層から礎を含む粘性の強い赤紫色を帯びた褐色の地山層へと、漸次変化している状態にあった。

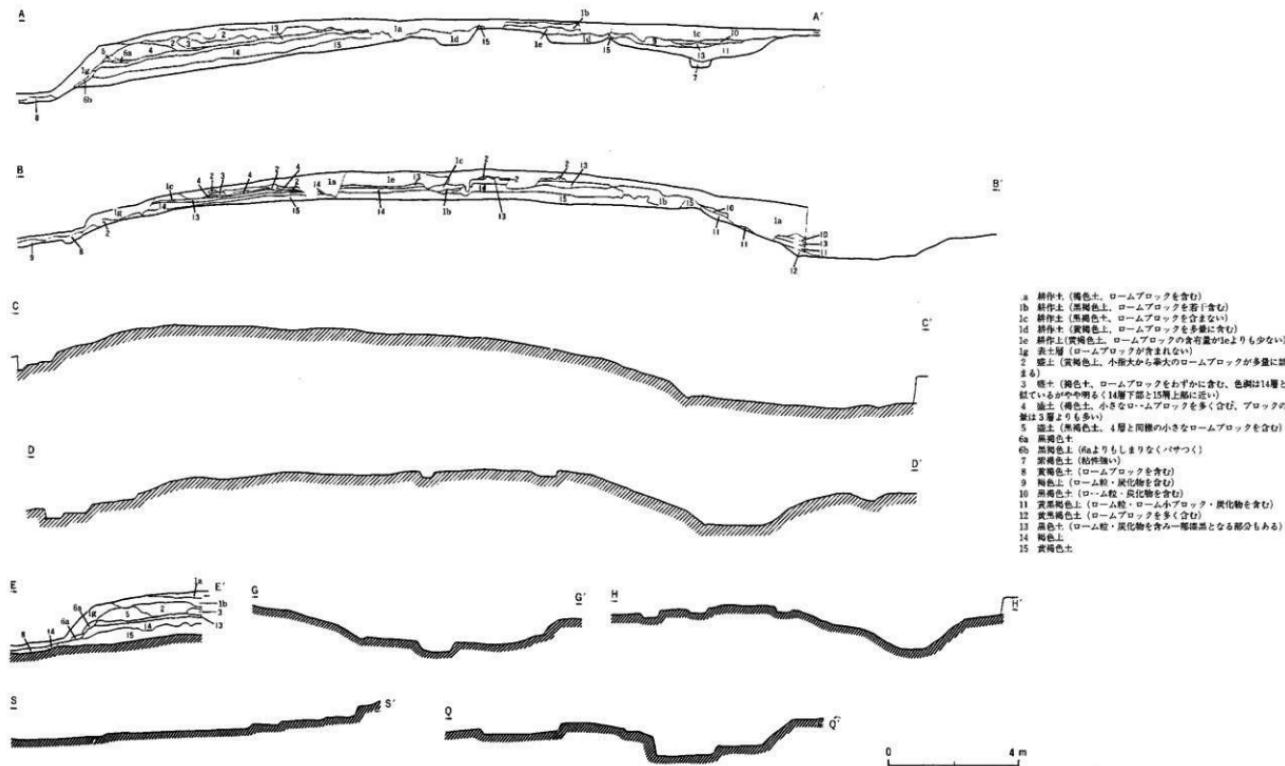
周溝は尾根状地形を切る南側が高い位置にあってやや幅広く設けられている。そして西側へも低くなっているが、東側は徐々に狭く深くなっている。東側へ移行していく部分では、断面形が底の平坦な逆台形状をなし、しっかりした堅い外壁のラインは直線的で北コーナー部へ至っている。北コーナー部付近では外縁が東側へ突出して広く設けられており、壁側の底近くには浅い段がつけられている。この部分の壁は立ち上がりの角度も弱く、搅乱のためもあるのかやや軟らかい。

周溝内からは土器が多く出土している。それらのほとんどは墳丘の南側から東北のコーナー部にかけての墳丘裾部と周溝内からの出土である。遺物は溝を覆う第11層の黄黒褐色土の上部から第13層の黒色土中に多く含まれており、周溝がかなり埋まつた段階で遺存したことを示していた。

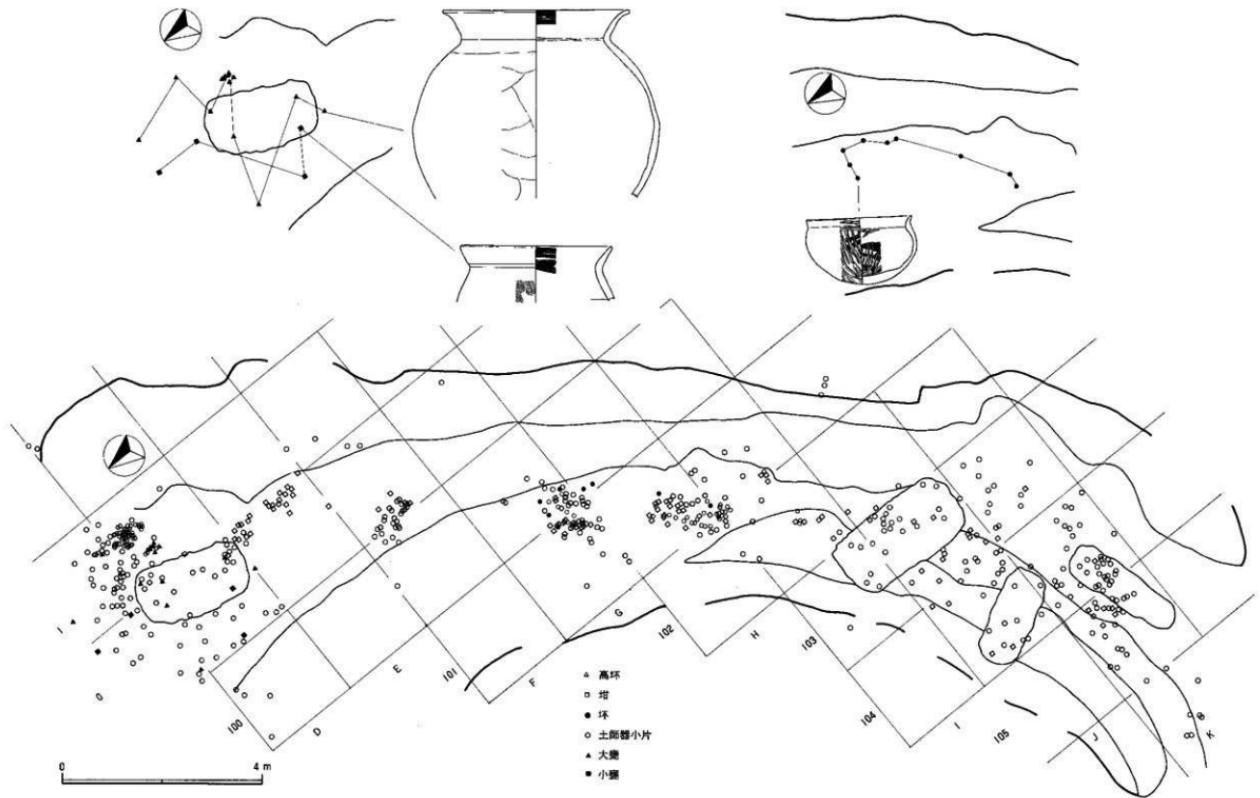
出土した土器は第2号土壙東側の周溝内から出土した1個体の光形の壺（第18図4）以外はす



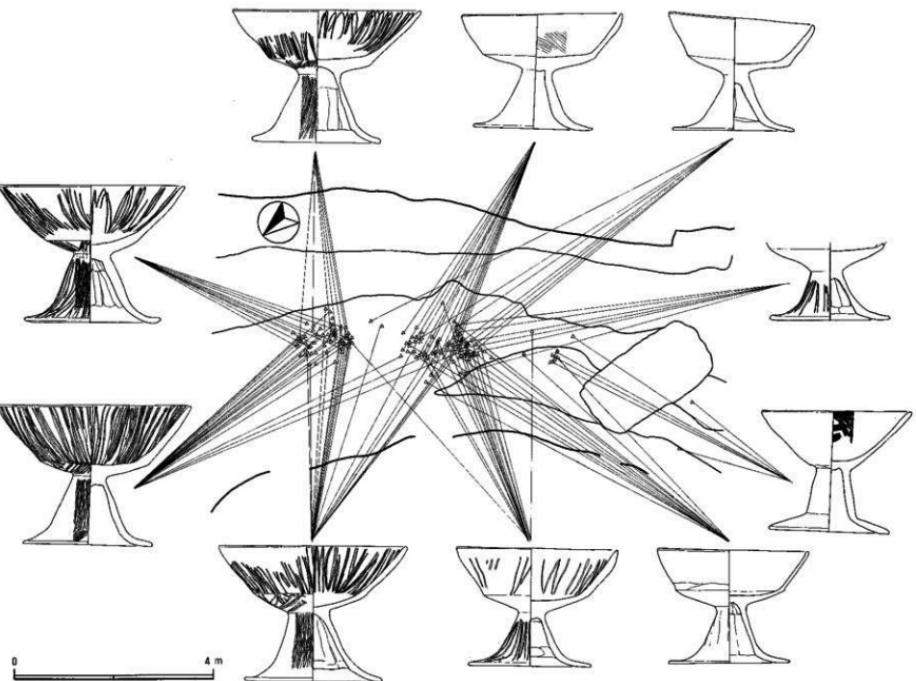
第4図 第1号古墳 (1/120)



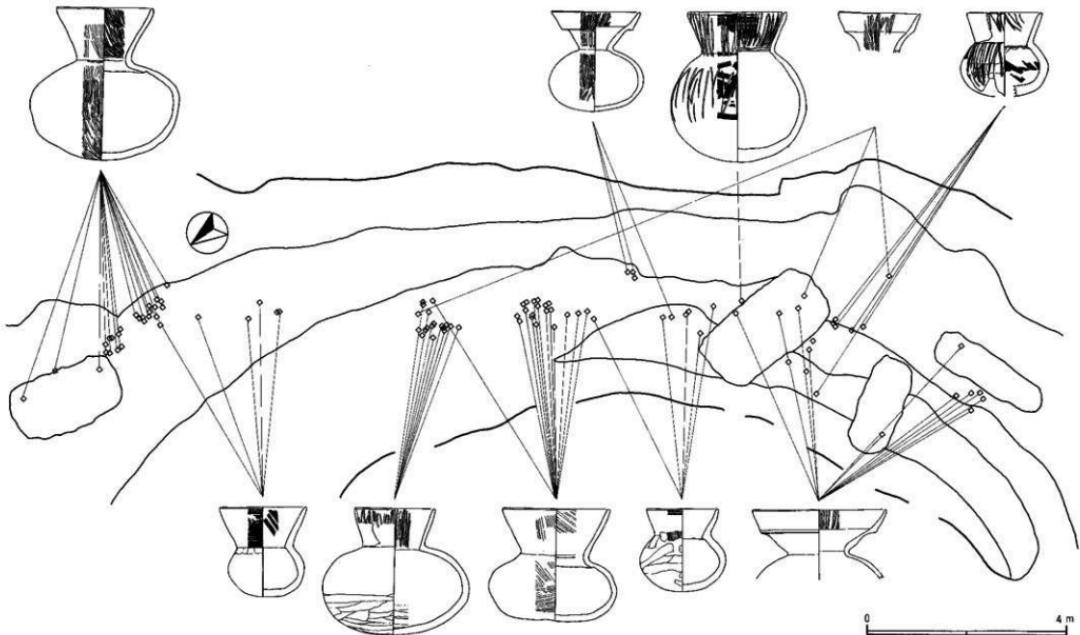
第5図 第1号古墳の層序 (1/120)



第6図 第1号古墳遺物出土状態(1) (1/80)



第7図 第1号古墳遺物七状態(2) (1/80)



第8図 第1号古墳遺物出土状態(3) (1/80)

べて破片であり、殊に2、3の小形の壺以外は微細な小破片となって出土している。そうした土器片の出土状態で注目されるのは、割離したようなごく微細な小片を多量に含み、一部では土屑が介在しないほどそれらの土器片が重なり合っておびただしく出土する個所が数カ所検出されたことである。その中心となっている土器は高環であり、わずかに壺と塊が伴っている。そうした土器の出土状態は、高環等がその場所でことごとく破壊されつくした状態を示すものとみなされた。本墳とはば同期とみられる諒訪市本城1号墳、同市一時坂古墳、及び後に記す狐塚第2号墳の周辺内に遺存した祭祀用土器群とは明らかに異なる出土状態を示していることは、想定される墓前祭のあり方と関連して注目されるところである。

土器はある程度のまとまりをなして分布している。そのうち高環の集中する個所は、墳丘の南側中段位に設けられた平坦面の東北側先端部付近に3カ所あり、計10個体が出土している。集中個所は3カ所がほぼ等間隔で並んでいるが、中央の集中個所には7個体、東北側の集中個所には4個体がある。このうちの2個体は両方の集中個所にまたがった接合関係をもっている。第2号土壙に近い西南側の集中個所は規模が小さく、やや粗製の高環1個体のほか、中央の集中個所から出土しているものと接合関係をもつ破片がある。壺は高環の集中個所に各1個体があり、高環と同じような集中個所間の接合関係がある。壺はその他にも何カ所かから出土しているが、それらの地点では他の器種とセット関係をなして出土しているものはない。塊は1個体あるが、中央と東北側の集中個所に伴って接合関係をもっている。要するに、高環を中心とする3カ所の集中個所は、中央の集中個所が介在することで、その同時性ないしは遺物の一括性は強いとみられるのである。

なお、周辺の東北コーナー部から第27図3・5・6・7・9の鉄剣及び刀子が出土している。

**主体部** 主体部は発見されなかった。発掘前は墳頂部から東側の烟にかけては周辺も埋まつた平坦な地形であった。土も相当に動かされているようで、土層も耕作による擾乱が著しい。今回の調査で出土した鉄剣類の残片は、そのほとんどがこの平坦な地形の耕土中の浅い位置から発見されている。かつて周辺の東側の烟からは直刀が5本出土し、そのうちの4本はまとまって立った状態で出土したというが、そこからは何ら遺構は発見されなかつた。また、勾玉が1点南側周辺上に位置するK-103グリッドの黒土中から出土した。

主体部は烟の造成や長年の耕作で破壊されたものと考えられる。墳丘の中心部から南側の地表面には縦横に走る擾乱溝の痕跡が著しいが、その擾乱溝は墳丘の全体に認められた。周辺から発見された鉄剣の残片等は、耕作等で東側の烟へ動いたものと考えられる。

**時期** 本墳は、周辺内に遺存していた土器群の型式的特徴から、5世紀末の年代が考えられるが、遺物の出土が周辺を埋める土層中であることから、築造年代はそれよりも若干古くなるものと思われる。

## 2 第2号墳

発掘調査終了後、造成工事の際に多量に土師器類が採集された。その場所は第1号墳よりもわ

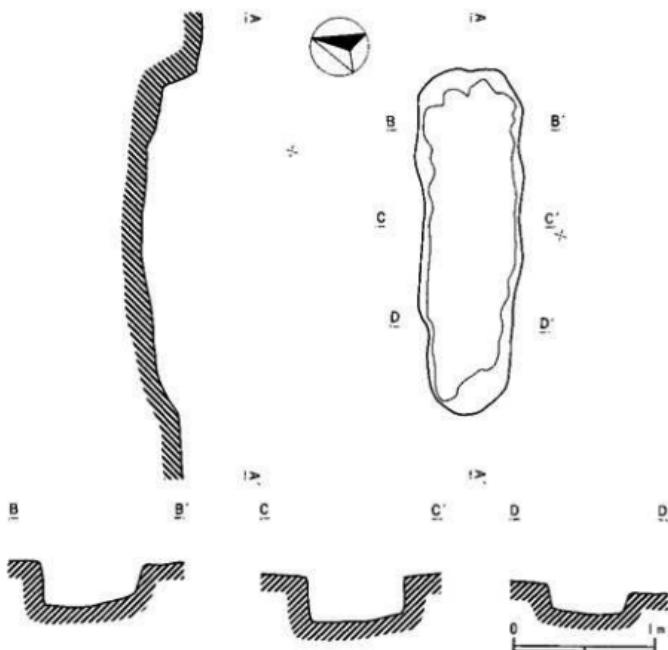
すかに北側に下った位置であり、土器群は第1号墳と同様な黒色系土層の詰まった、円形にまわる周溝内から発見されたという。

採集された遺物はほとんどが土師器であり、中に1個体完形の須恵器甕がある。これらの土器群は復元された状態や採集者の話から総合すると、一括出土の状態をとるものであったらしい。比較的大きく割れた状態の土器が多く、復元後何個体かが完形品となっている。このことから、第2号墳の周溝内からの土器の出土状況は第1号墳とは異なるものであったことが推察される。第2号墳はおそらく第1号墳と並ぶような位置格好で北側へ伸びる尾根状地形の頂部付近に築造されていたと考えられる。

### 3 第1号土坑

第1号墳の南側周溝内で、K-104・105グリッドに位置している。周溝中央の底部で周溝の伸びる方向に沿った位置格好で設けられている。

平面形は長楕円形を呈している。長軸方向はN-73°Eで、大きさは2.5×0.8m、深さは中央



第9図 第1号土坑 (1/40)

の深い部分で40cmほどある。底は平らだが東壁側と西壁側に高くなる船底状を呈すやや軟弱な底である。壁は東壁がやや開き気味で南壁は緩く皿状に立ち上がるが、北壁と南壁は直壁に近い。覆土は赤紫色を帯びた褐色の粘性の強い土層で、上面は周溝の底を覆う第11層の黄黒褐色土であった。

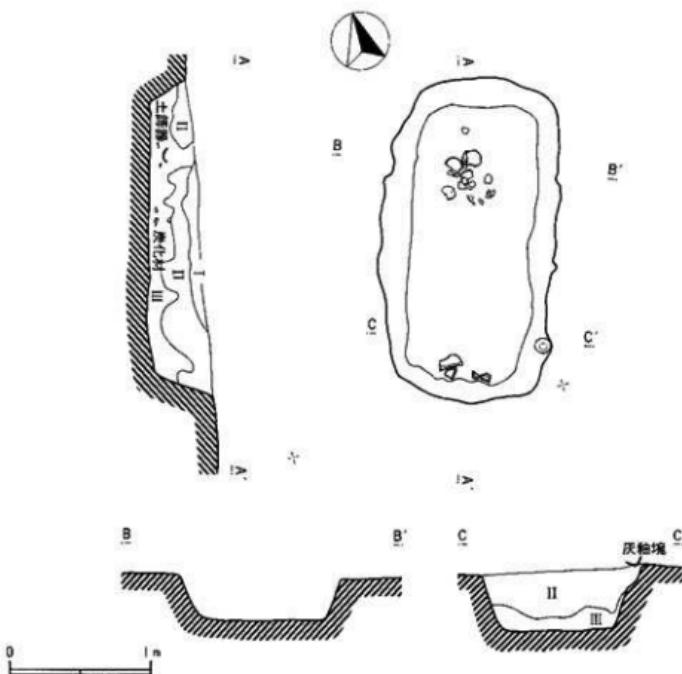
出土遺物がないため時期や性格については特定できない。しかし、周溝の底を埋める第11層が上面を覆っていることから第1号墳と近い時期の遺構ではないかと思われる。

## 第2節 平安時代

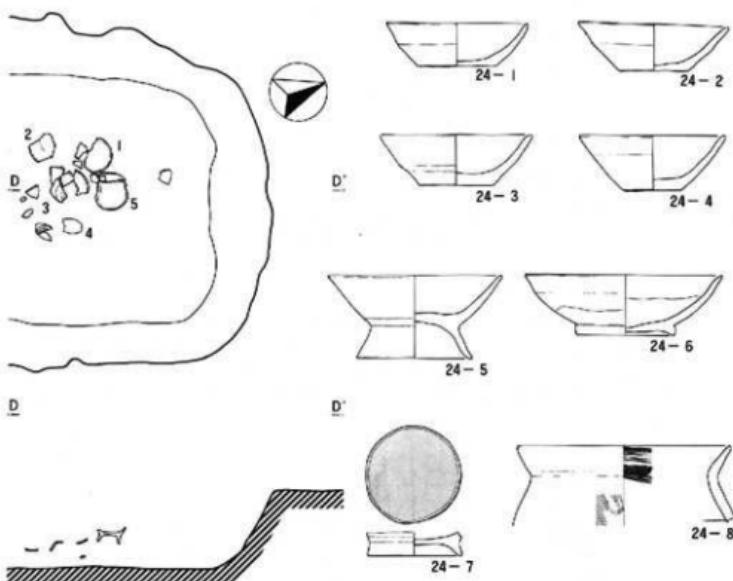
### I 第1号土壙

第1号墳の東北コーナー部の幅広く設けられた周溝内で、D—0 グリッドを中心とする位置にある。平坦な周溝の底の中央に、古墳の周溝と同じ方向に長軸方向を合わせて設けられている。

平面形は隅がわずかに丸い長方形を呈している。長軸方向はN-18°-Eで、大きさでは2.3×



第10図 第1号土壙 (1/40)



第11図 第1号土壙遺物出土状態 (1/20) (1/4)

1.3m、深さは北壁側で25cm、南壁側で46cmほどである。底は平坦で、ロームの壁はやや開き気味で直線的に立ち上がっている。南壁下の底には拳大の礫4個からなる小さな集石がなされている。覆土は3層に分けられる。I層はロームを含む黒色土。II層は拳大のローム塊を含む黒褐色土。III層はローム粒と炭化材の破片を含む黒褐色土である。覆土全体に炭化物が多く含まれていたことは注意される。

遺物は北壁下から30cmほど内側で、底から10cmほどの高さの第III層中から土師器の壺が一括出土している。それらのうち完形に近いものは高台付壺1点と壺4点で、正位に置かれて割れた状態で出土している。また、南東のコーナー部の壁際からは、灰釉壺と高台付壺の底部などが出土している。その他土壙周辺の塗内からは、甕2個体分の口縁部が破片で散乱した状態で出土している。

土壙の年代は、伴出した土師器と灰釉陶器の年代観から11世紀前半と考えられる。

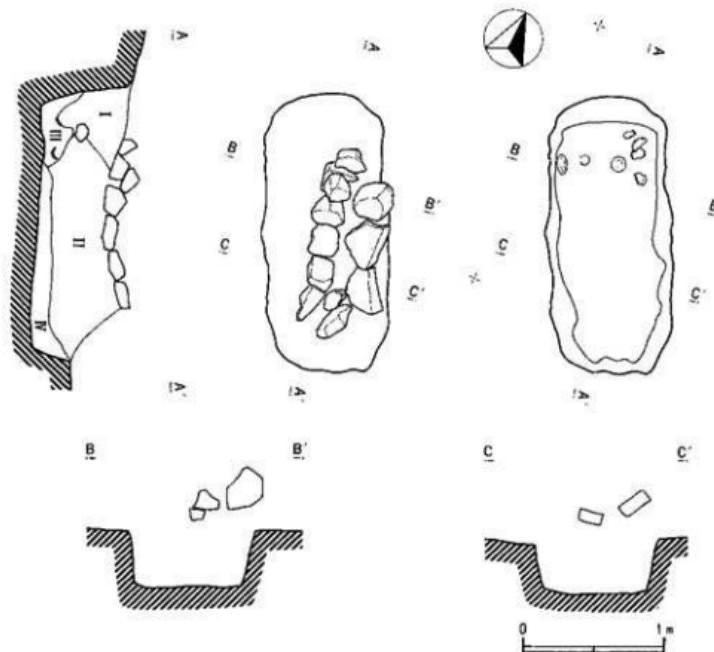
### 2 第3号土壙

第1号墳の墳丘南側裾部のJ-104グリッドを中心とする位置で、第2号土壙の西約2mに第2号土壙と並んで設けられている。

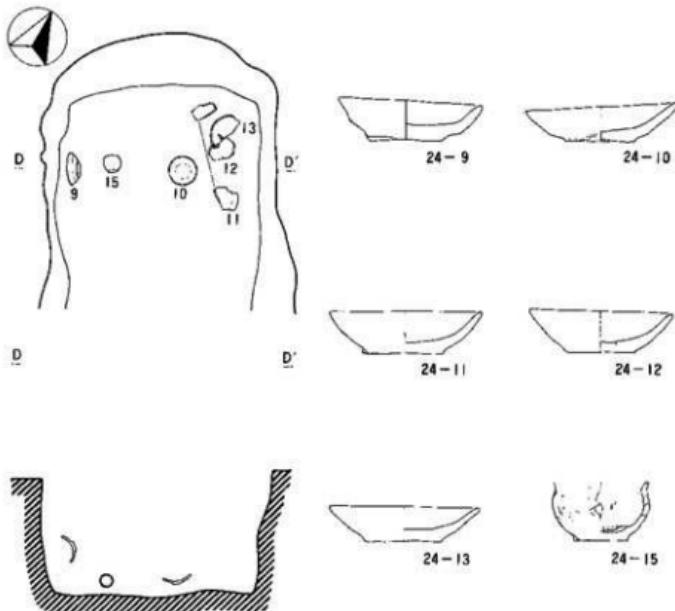
平面形が長楕円形に近い隅丸長方形を呈している。長軸方向はN-23°-Wで、大きさは2.0×0.9m、深さは北壁側で54cm、南壁側で30cmほどである。土壤の上面には集石がなされているが、その集石の上面から底までは86cmほどの深さがある。底は中央からやや北壁側に寄った位置から南壁側へ10cmほどの比高差で緩く傾斜している。壁はロームの堅い壁がやや開き気味で直線的に立ち上がるが、プランの北側の壁はわずかに内湾するように立ち上がっている。

覆土は4層に分けられる。底は北壁下を除いて褐色土の第IV層で覆われている。底が低い凸起状をなし、一括遺物のある北壁側の底は、やや赤紫色を帯びた粘質褐色土の第III層が盛られるよう堆積し、その上面には拳大の礫が1点置かれている。それらの底近くの土層の上には、北壁側にローム粒を混入した褐色土の第I層が堆積するが、土壤の大部分は3~5cmの大ロームブロックを混入する褐色土の第II層で埋められている。

土壤の上面中央部には石組状の配石がなされている。第2号土壤の底近くに遺存する礫の配され方とよく似た構造のもので、第2号土壤上面の礫と同じ褐色土中で、礫の上面はほとんど同一レベルにある。配石は東壁際にやや大形の一枚石の割れた平盤石と角礫を立てて組むように設け、



第12図 第3号土壤 (1/40)



第13図 第3号土壙遺物出土状態 (1/20) (1/4)

中央には人頭大の礫を長軸線の方向からやや北へ傾く方向で1列に並べている。礫は下面が平らに並べられているが、全体に中央に落ち込むようにわずかに浅く皿状に凹んでいる。配石は西壁側にも同じような構成でなされていたと考えられるが、礫は耕作による溝で抜かれている。石の種類は第2号土壙のものと同様であり、東壁側に立てられた角礫は「まめっこ石」であった。

遺物は北壁下の底近くの第III層中に遺存している。それらは完形の土師器環2、小形甕1の他は环の割れたものと破片である。完形の环は中央やや東寄りの位置に正位に置かれたものと、西壁際のやや高い位置から出土したものである。小形甕は环と並ぶ中央やや西寄りの床近くに横転している。环の破片は北東のコーナー部のやや高い位置にまとまっている。

土壙の時期は、出土した土師器の年代観では11世紀中ごろと考えられるが、第2号土壙と並んで設けられていることから、両者の間にそれほど大きな時間差はないのではないかと思われる。

### 3 第2号土壙

第1号壙の壙丘南側縁部のJ-103グリッドを中心とする位置で、西2mに位置する第2号土壙と共に並んで設けられている。本址は、古墳周辺内の褐色土中に、掘り込みのプランは確認できなかったものの、環状にめぐる人頭大礫が検出されたことで存在が明らかとなった。しかし土壙

だとは思われず、発見当初は何らかの特殊な配石遺構ではないかと考えられた。

平面形は隅がわずかに丸くなる長方形を呈している。長軸方向はN-3°-Eを示し、ほぼ北を向いている。大きさは2.7×1.4m、深さは北壁側で54cm、南壁側で30cmある。上部で検出した礫の上面から土壤の底までの深さは94cmほどある。底は平坦だが南壁下はやや高い。全体に堅く良好な床である。壁は堅いロームの壁で、やや開き気味で直線的に立ち上がっていいる。

土壤は礫を四方の壁際に据えている。北壁下には盤状礫1枚と円礫2個を並べ、向かい合う南壁下には厚い盤状礫が1枚立てられている。西壁と東壁は中程の位置に盤状礫を立てているが、東壁の盤状礫は厚い大形のものである。

壁際の礫が床に直接立てられているのに対し、その内側に配された礫は、床との間に黄褐色土の間層をはさんで遺存している。それらの礫のうち、西壁の壁際に立てられた盤状礫の内側には、やや間隔をあけて厚い大形の盤状礫が1枚、横に長く立てて据えられている。東壁際に立てられた大形の盤状礫とこの盤状礫との間には、大形でやや丸味のある礫11個がほぼ2列に並べられた状態で遺存しており、東壁側には厚いやや扁平な角礫が横に立てて積まれている。配石の規模は長さ約1.9mで、幅は0.5~0.6mある。また、2列に配された部分だけの長さは1.4mある。

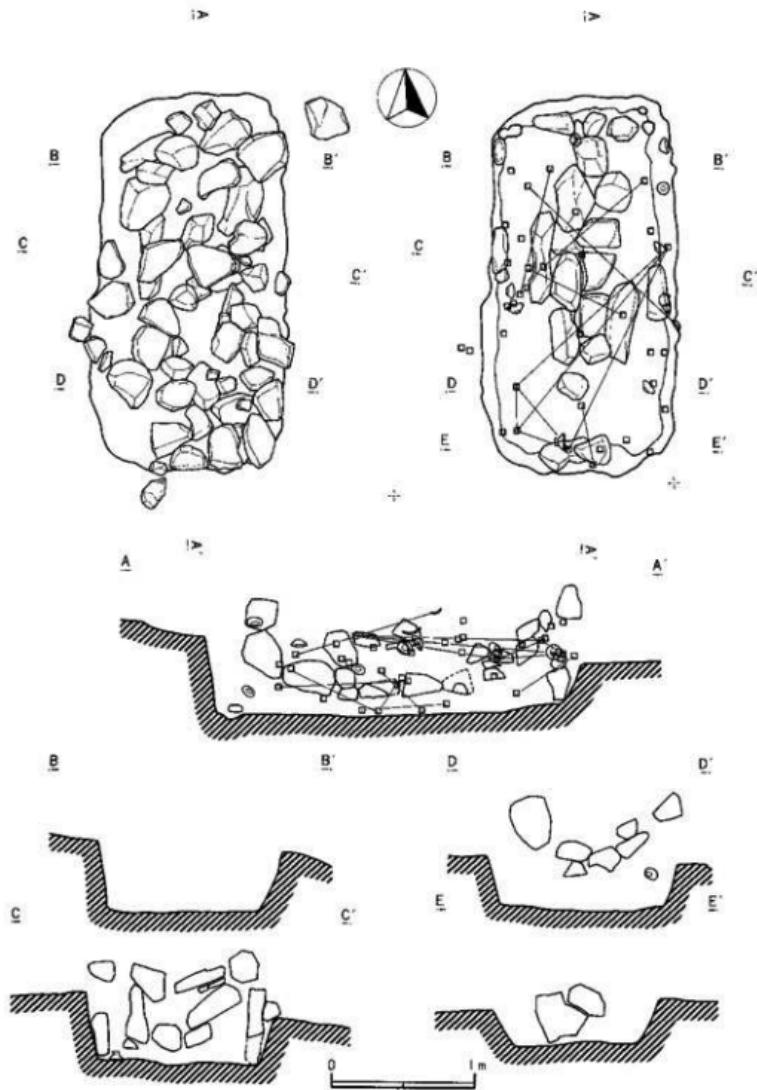
2列に配された礫は中央部ではほとんど平らであったが、北側の先端の礫は高い位置にあって石柱のように立てられている。この礫と北壁との間には、北壁下の礫もあってほとんどあいたスペースがない。しかし南側の先端の礫と南壁下の礫の間には若干の空間がとられている。ここには後で述べる床面の一括遺物が遺存していた。

壁際、中央に配された礫は、男性の大人がやっと抱きかかえられる程度の重さのものであり、特に中央に長く立てられた盤状礫などは、二人掛かりでやっと運べるほどの重量のものであった。

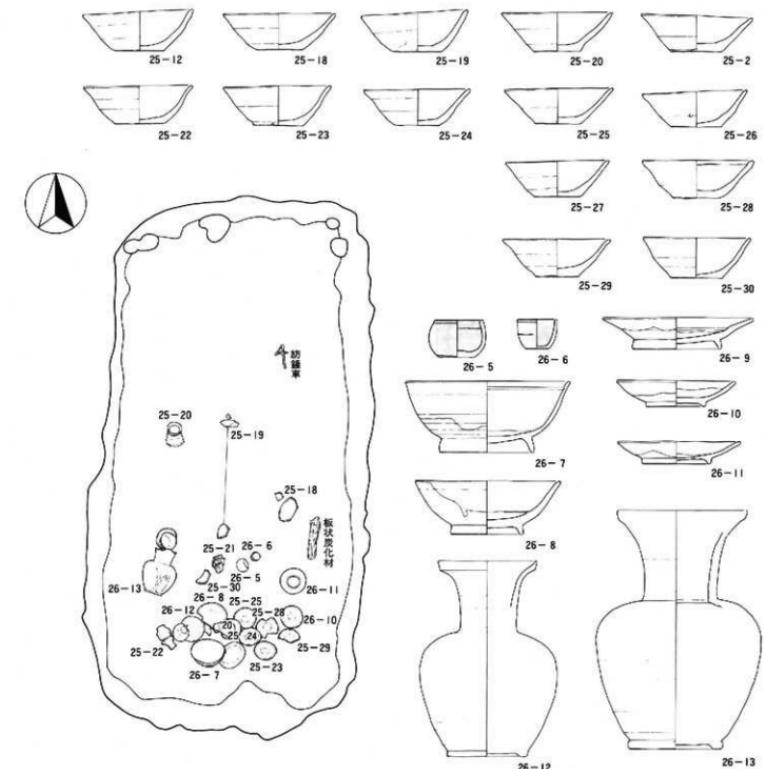
土壤の底近くに整然と配された状態で遺存する礫の上部の覆土中には、拳大の礫も混えた多量の人頭大以上の礫が検出されている。遺構の発見当初は、掘り込みのプランは確認できなかったが、礫はプランに沿って環状にめぐって検出され、中央部は礫のない平坦な面をなしていた。

それら上部の礫は、東壁側と西壁側に立てられた2枚の大形、盤状礫の両上部から、底近くの中央に2列に遺存する礫に向かって傾き、中央へ落ち込んで崩れた状態であり、かつそれが土壤の長軸方向では、全体に中央にレンズ状に凹んだ状態で遺存していた。それらの礫の中には、男性の大人がやっと運べる程度の重さの円礫や扁平礫が約70個入っている。遺跡周辺の丘陵上には礫がほとんどないことから、それらの礫は丘陵下から運び上げられたものと考えられる。礫の中には、丘陵の西側の扇状地に位置する高部遺跡周辺でよく見かけられる「まめっこ石」と称される堆積岩の礫が含まれることから、それらの礫は高部側から運び上げられた可能性がある。

覆土は中央の底近くに遺存する礫の上面のあたりを境に、上部に遺存する多量の礫は中央にレンズ状に凹んで堆積する黒色土中にある。2列に遺存する礫の上面に近い黒色土中の下部には炭化物が比較的多く認められた。一方、底近くに遺存する礫の周囲はロームを含む埋土と考えられる黄褐色土で覆わされていた。



第14図 第2号土壤 (1/40)



第15図 第2号土壤遺物出土状態 (1/20) (1/4)

遺物は覆土中から出土したものと、床面近くから一括出土したものがある。覆土からは土師器の壺と高台付壺、及び壺の破片が出土している。高台付壺は南壁側に1個体ある。そのほか完形かほぼ完形に近い形態の壺は東壁側に4点、西壁側に2点、北壁側に1点ある。それらは破片も含め、主として底近くに並べられた碟よりも上位で、並べられた碟と東、西の両壁間から碟と共に出土している。また、底近くに並んで遺存する碟の上部となる土壇の中央部からはまったく出土しておらず、北壁側からもほとんど出土していないことは、壁際からだけの出土と関連して注意されることである。かつそれらの壺などが、数点の床近くのものと接合関係をもちつつ、主として覆土中の東壁側と西壁側の間に接合関係をもつことは、それらの遺物の一括性の強さばかりでなく、特異な埋葬の様式が推察される点でも注目すべきことである。

床面近くの遺物は、主として南側からまとめて出土している。遺物は、壁に沿って等間隔で並ぶように比較的壁に近い位置にあるものと、それらの遺物とは離れた中央の位置にあるものとがある。遺物の中には接合関係をもつものが若干あるが、中央の2点が床面近くの接合例である。他は東・西両壁側の上部覆土中のものとの接合である。

壁に近い位置にあるものでは、南西のコーナー部から南東のコーナー部にかけて一括土器群が、床面から1~6cmの高さに位置している。それらは土師器壺11・高台付壺2、灰釉壺2・皿3（段皿1）・長頸瓶2である。灰釉長頸瓶2個は南西のコーナー部にある。1つは口縁部を欠損するもので横転しており、もう1つは口縁をわずかに欠くもので立っている。南壁側には完形の灰釉壺と段皿が長頸瓶の脇に置かれている。その他の周辺の遺物は土師器の壺で、正位に重ねられたものや伏されたものがあり、中には割れた欠損品もある。東壁側には灰釉皿が2枚あるが、1枚は伏されている。また、伏された灰釉皿の北側には、底面から6cmの高さに炭化材が遺存している。長さ21cm、幅5cmほどの薄い板状のものである。周囲や土壇に焼けた痕跡は認められないので、はじめから炭化していたのではないかと思われるが、どのようなものであるか性格はわからない。

以上の壁寄りの位置に並ぶ遺物とは若干の空間を問にはさみ、土壇南側の中央に位置する遺物は2点の小形黒色土器と土師器壺の破片である。小形黒色土器は2個とも完形で、ごく近い位置に並べられた状態で、床から2cmと4cmの高さから出土した。また、壺の破片は床から2.5~8.5cmまでの高さに位置しており、このうち約50cm離れた位置にある2点は同一個体で接合関係にある。一方、中央からやや北側へ寄った位置からは、床面に密着して鉄製の筋鉤車が1点出土したが、これは軸の片側が折られたものであった。

土壇の時期は、出土した土師器と灰釉陶器の年代観から、11世紀前半と考えられる。



## 第IV章 遺 物

### 第1節 古墳時代の土器

#### 土師器

##### 坏

古墳時代の土師器坏は第1号古墳から1点、第2号古墳から7点の計8点出土している。この坏はおもに形態により次の4種に分類が可能である。

##### 坏A

すべて第2号古墳から出土している。完形のものは2点であるが、器形はどれも底部から内湾気味に立上がり、直立して口縁部に至る形態をとるものと思われる。調整は外面は箒削りの後横方向の範磨きが施されるが、内面は横方向の範磨きと刷毛目を施すものの2種がある。また、内面を黒色処理されているものも認められる。法量は口径が13.5~15.7cm、底径が4~5.5cm、器高は5.5~5.9cmである。

##### 坏B

第2号古墳から1点出土している。底部を欠き、全体の器形は明らかでないが、鉢を思わせるような大形のもので、口径は21.1cmある。底部から内湾気味に立上がり、口縁部が外方に開く形態をとる。調整は外面が撫で、内面は縦方向の暗文状の範磨きの後、横位の範磨きを1条施している。また、内面は黒色処理されている。

##### 坏C

第2号古墳から1点出土している。器形は丸底の底部から内湾気味に立上がり、内傾した後、外方に開く短い口縁部がつく形態をとる。調整は胴部外面が横方向の範磨き、口縁部内面が撫でと磨きで、胴部内面は磨きが施される。また、内面は黒色処理されている。口径は12.9cm、器高は7.0cmを測る。

##### 坏D

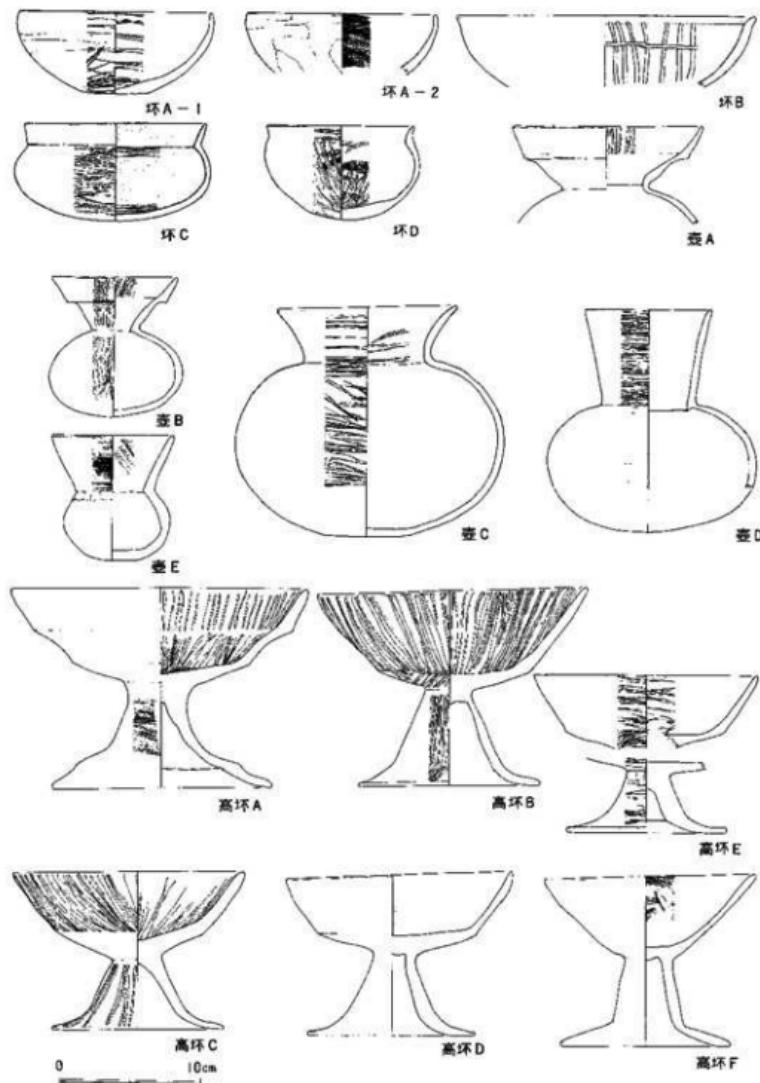
第1号古墳から1点が出土している。内湾した胴部に短い口縁部が開き気味に付く。丸底。調整は口縁部外面は横方向の範磨き、胴部は外面が刷毛撫での後縦方向の範磨き、内面も刷毛撫での後縦方向の範磨きである。口径10.6cm、器高6.6cmを測る。

##### 高坏

本遺跡からは第1号古墳及び第2号古墳から総計33点の高坏が出土している。この高坏は器形・技法・法量などから次の6種に分類が可能である。

##### 高坏A

3点の出土があるが、いずれも第2号古墳からの出土である。坏部は底面と体部との間に接を



第16圖 狐塚古墳出土土器種別分類 (1/4)

持つて外反した後、さらに段を持って広がりながら立上がる。脚部も「八」の字状に広がった後、屈曲して大きく開き、さらに段を持って大きく開く。坏部内面は段や稜となっている個所ごとに縦方向の範磨きが施されている。出土した高坏の中では最も大きな部類に入る。法量は復元により完形となった(20-5)が口径21.2cm、底径15.5cm、器高14.3cmである。他の2点は底径がそれぞれ14.5cmと17.6cmである。法量にバラツキが認められるが、(20-5)以外は破片からの復元実測であり、法量は若干異なる可能性がある。

#### 高坏B

4点の出土があるが、いずれも第1号古墳からの出土である。坏部は底面と体部の間に稜を持って広がる。脚部は「八」の字状に広がった後、屈曲して大きく開く。坏部内外面及び脚部外面には、縦方向の範磨きが施されている。口径は最大で19.3cm、最小で18.7cm、底径は最大13.7cm、最小は12.7cm、器高は最大14.0cm、最小13.3cmとやや大形である。

#### 高坏C

13点の出土があり、2点が第1号古墳で出土している他は第2号古墳からの出土である。坏部は底面と体部の間に稜を持って広がる。脚部は「八」の字状に広がった後、屈曲して大きく開く。坏部内外面及び脚部外面には、縦方向の範磨きが施されている。大きさがやや小形な点を除けば、技法・形態は高坏Bとはほぼ同じであるが、坏部底面に範磨きが施されないものが多く見受けられる。また、坏部底面と体部の間に見られる稜が緩やかなものも認められる。法量は口径が最大で17.5cm、最小で15.4cm、底径が最大で12.4cm、最小で11.4cm、器高が最大で12.1cm、最小で11.2cmである。

#### 高坏D

第1号古墳から3点の出土があった。坏部は底面から体部へ稜を持って立上がり、箱形に近い形状を示す。脚部は「八」の字状に広がった後、屈曲して大きく開く。調整は横方向の撫であるいは刷毛目である。法量は口径が最大で16.0cm、最小で14.5cm、底径が最大12.2cm、最小が12.0cm、器高が最大で11.5cm、最小が11.2cmとはほぼ同じである。

#### 高坏E

第1号古墳から1点の出土があったのみである。坏部は脚接合部から大きく広がり口縁部に至る。脚部は中間がやや膨らむ柱状の脚から大きく屈曲して開く。坏部内面は刷毛目調整が施される。法量は、口径が15.2cm、底径が12.2cm、器高が12.0cmを測る。

#### 高坏F

第2号古墳から9点が出土している。完形品の出土はなく全体の形状は明らかでない。脚部が4.5cm~5.5cmと他の高坏に比して短い。調整が横方向の刷毛目あるいは範削りのものを一括して扱ったが、技法・法量により細分も可能である。坏部との接合例はないが、(21-7・8)に横方向の刷毛目・範削りを施したものがあり、同系統のものと考えられる。坏部のものは2点で、口径はそれぞれ18.1cmと15.9cmである。底径を測れるものは7点で、最大が12.2cm、最小が10.4cm

である。

#### 壺

壺は第1号古墳から10点、第2号古墳から3点の計13点が出土している。また、形態などから次の5種に分類される。

#### 壺A

第1号古墳から1点が出土している。大きく広がる有段の口縁部を持つ。肩部以下を欠損するが、球形でやや扁平な胴部を持つものと思われる。調整は撫でと磨きによっている。口径は13.5cmと大形である。

#### 壺B

2点の出土があるが、どちらも第1号古墳からの出土である。丸底でやや扁平な胴部に、段を有する大きく広がる口縁部を持つ。口径と胴部最大径がほぼ等しい。形態は壺Aと同じであるが、こちらの方が小形である。調整は外面及び口縁部内面に縱方向の範磨きが施される。口径は8.2~9.0cm、器高は10cmを測る。

#### 壺C

第2号古墳から1点出土している。小さな底部に球形でやや扁平な胴部に、外反する口縁部が付く。調整は口縁部・胴部外面は横方向の範磨き、口縁部内面は撫での後範磨き、底面は範削り、カキ目が残る。口径12.9cm、底径6.1cm、器高16.5cmを測る。

#### 壺D

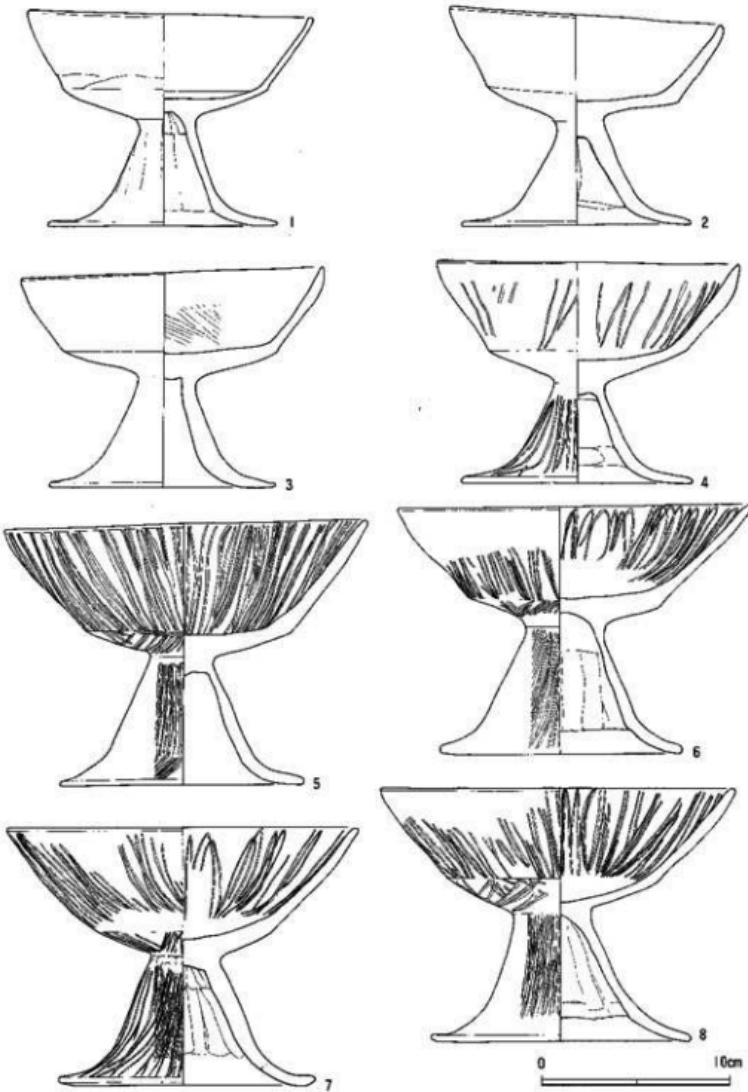
所謂培形土器。第1号古墳から4点、第2号古墳から2点の出土があった。丸底に球形でやや扁平な胴部に口縁部が長く立ち上がる形態をとる。第1号古墳出土のものと第2号古墳出土のものを比較すると、第1号古墳のものは口縁部がやや短く、外方へ開き気味なのに比して、第2号古墳出土のものは口縁部が直立気味で、口縁部の長さも胴部高とほぼ同じくらいの長さを持つ。また、調整も第1号古墳のものが内外面とも縱方向の範磨きを施すのに比して、第2号古墳のものは横方向の範磨きが施される等の相違がみられる。また、第2号古墳のものの中には内面に黒色処理されたものも1点認められる。法量を比較すると、第1号古墳は口径が7.9~10.6cm、器高が11.3~15.3cm、第2号古墳が口径9.0~9.6cm、器高が15.9~16.4cmで、第2号古墳の方がやや大形である。

#### 壺E

小型丸底土器と称されるものの一群である。丸底で球形、やや扁平な胴部に大きく開く長い口縁部が付く。口径は胴部最大径とほぼ同じかやや大きい。胴部内面は刷毛撫でが施される。胴部下半に範削りを施した後、外面全体を縱方向の範磨きで調整している。法量は口径が7.3~8.7cm、器高が8.3~9.0cmと小形である。

#### 甕

第2号古墳から2点出土している。球形の胴部に外反する口縁部が付く。調整は口縁部は横撫



第17図 第1号古墳出土土器(1) (1/3)

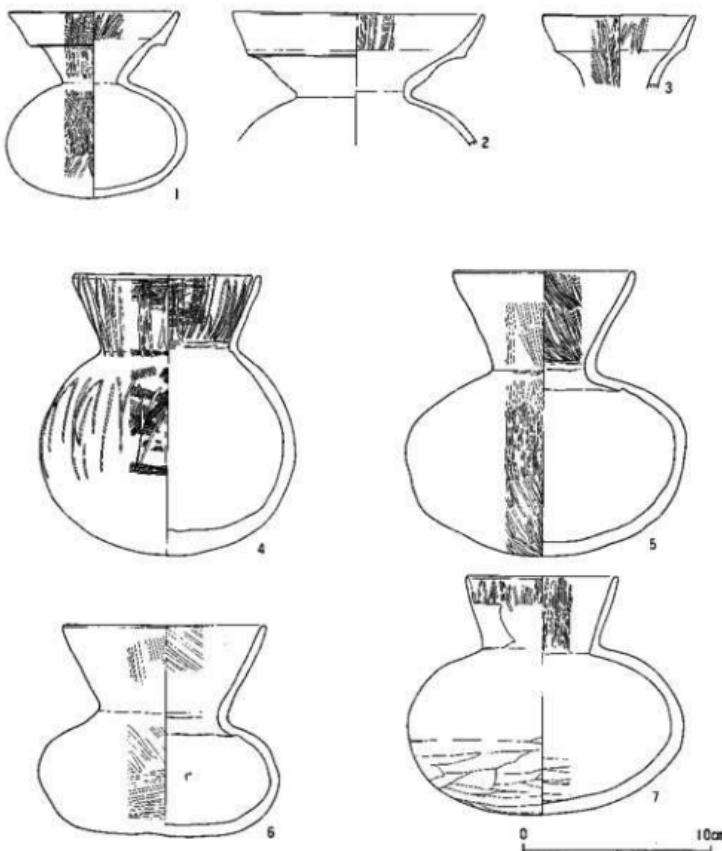
で、胴部は内外面とも鋸削りで、研磨はされていない。出土状態は明らかでないが、古墳からの出土遺物に煮沸具である甕の出土は珍しく、後世の混入とも考えられる。

#### 須恵器

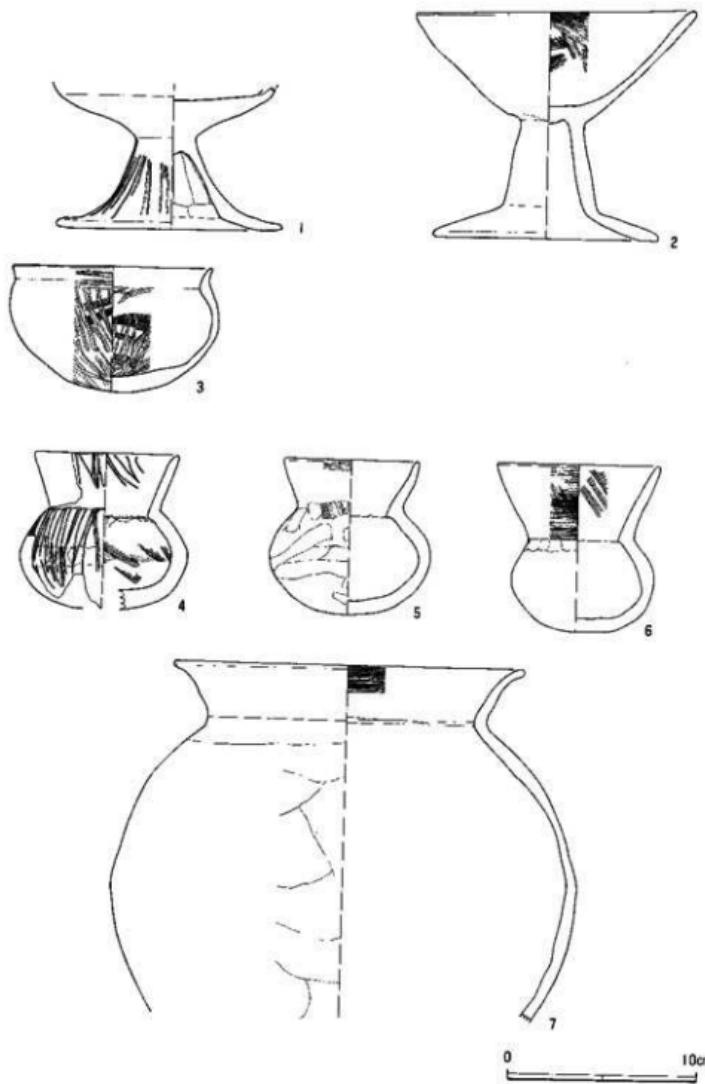
第2号古墳から蓋坏1点と甕1点の計2点が出土している。

#### 蓋坏

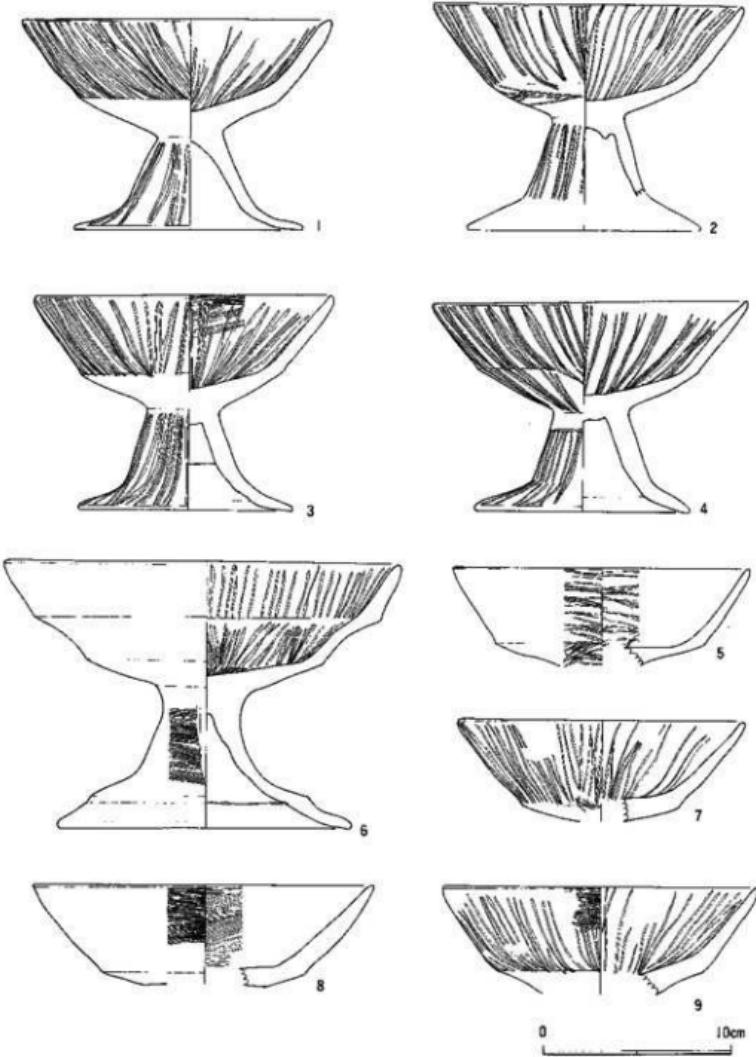
底部を欠くが、丸味を持った底部を持つ形態をとるものと考えられる。口縁部と底部の境がや



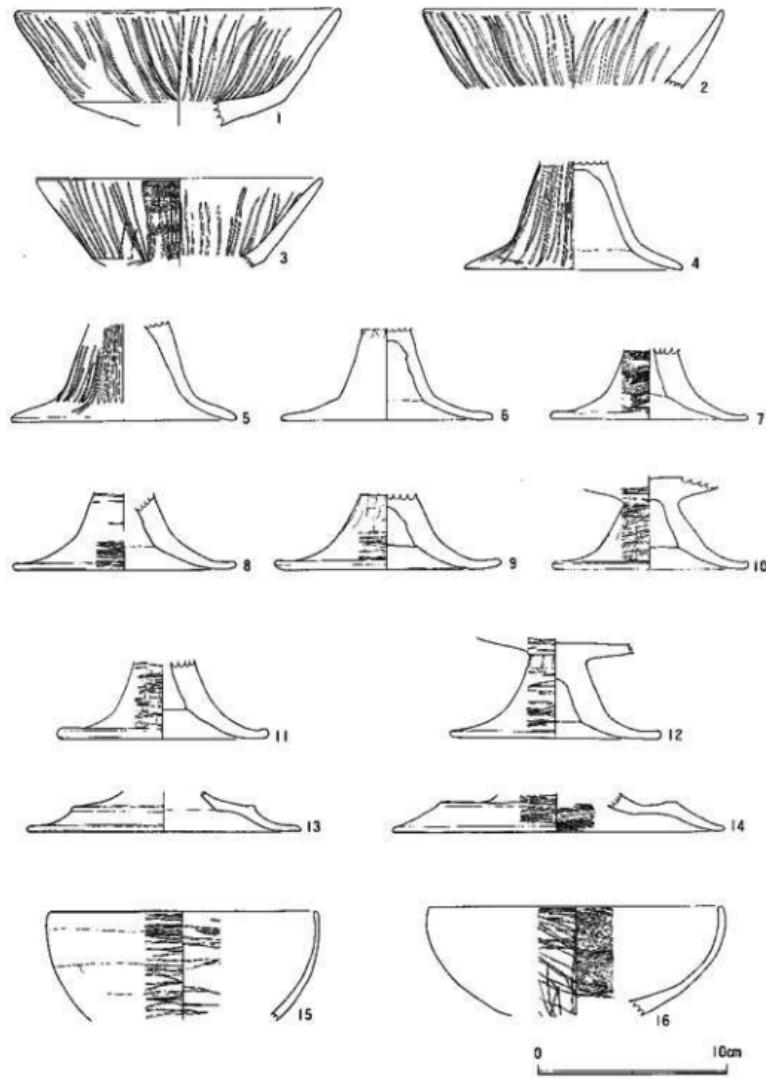
第18図 第1号古墳出土土器(2) (1/3)



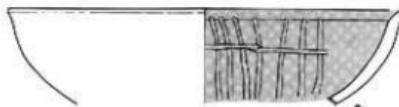
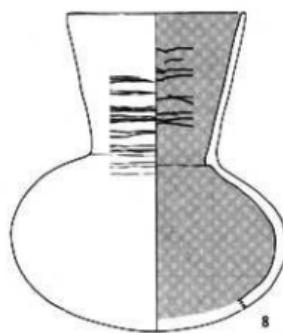
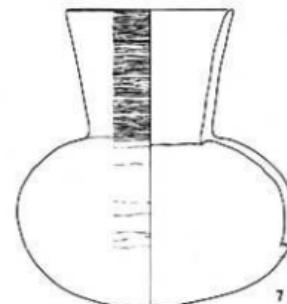
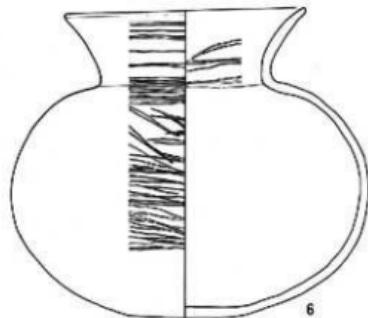
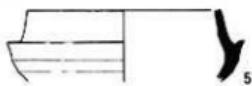
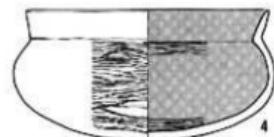
第19図 第1号古墳出土土器(3) (1/3)



第20図 第2号古墳出土土器(I) (1/3)

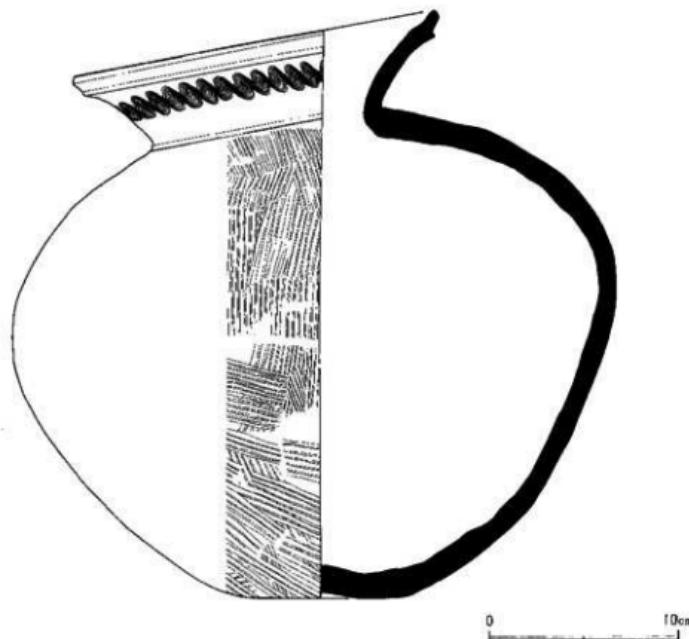


第21図 第2号古墳出土土器(2) (1/3)



0 10cm

第22図 第2号古墳出土土器(3) (1/3)



第23図 第2号古墳出土土器(4) (1/3)

や強く屈曲する。受部は先端が尖り気味で上方に開く。口縁部は内傾し、端部は平坦である。胎土・焼成とも良好であるが、酸化炎焼成により、外面は赤紫色、内面は黄褐色を呈している。口径10.5cmを測る。

#### 甕

やや上げ底となる底部を持ち、ゆがんだ胴部の最大形は、中位から肩部にかけてにある。口縁部も傾斜が著しい。口縁部から大きく開き、1段棱を持って口唇部に至る。口縁部に波状文を施す。胴部は縱方向の叩き目で、下半は後に横方向の叩き目を施す。口径19.6cm、底径8.8cm、器高はゆがみがあるが、27.8~31.3cmを測る。

## 第2節 平安時代の土器

### 土師器

土塹出土の土師器には、壺、高台付壺、皿、小壺、甕がある。

## 坏

坏は第1号土壤から4点、第2号土壤から30点の総計34点が出土している。形態は底部から内湾気味に外方に広がるもの、直線的に広がるもの、内湾気味に立ち上がるもの、内湾気味に立上がりた後口縁部で外反するものなどがあるが、法量を見るとさしたる違いは認められず、細分は難しい。法量は第1号土壤の坏が、口径が10.1cm～11.0cmで平均10.6cm、底径が3.9～5.4cmで平均4.8cm、器高が3.0～3.9cmで平均3.5cm、第2号土壤の法量は口径が10.2～11.3cmで平均10.8cm、底径が4.3～5.1cmで平均4.7cm、器高が3.2～4.2cmで平均3.7cmで、第1号土壤出土の坏の方が若干小形である。成形はゆがみの大きいものが多く、内外面ともザラザラで、後に調整を加えられず、また、特に使用された痕跡も認められない。

## 高台付坏

高台付坏は第1号土壤から2点、第2号土壤から4点の、計6点が出土している。高台の形態により次の2種に分類される。

### 高台付坏A

第1号土壤から1点が出土している。坏部を欠いているため全体の形態は明らかでないが、高台部は短いものである。内面は黒色処理されている。法量は底径6.7cmを測る。

### 高台付坏B

第1号土壤から1点、第2号土壤から4点の計5点が出土している。坏部の形態は直線的に広がるものと、内湾気味に立ち上がった後外反するものがある。高台部は高脚状の丈の長いものである。法量は、口径が12.5～13.4cmで平均12.8cm、底径が6.5～8.2cmで平均7.2cm、器高が5.7～7.2cmで平均6.2cmである。成形は坏と同じくゆがみが大きく、内外面ともザラザラで、後に調整を加えられていない。

## 小壺

第2号土壤から2点、第3号土壤から1点の計3点が出土している。形態により次の2種に分類される。

### 小壺A

第3号土壤から1点が出土している。平底の底部から内湾気味に立上がり、内傾した後外反する。口唇部を欠いているため全体の形態は明らかでないが、底径は3.8cmを測る。調整は体部内外面が共に撫でて、頸部には刷毛目が施される。2次焼成を受け、全面に剥落しており、孔が穿たれたようになっている個所も見られるが、人為的なものは明らかでない。

### 小壺B

第2号土壤から出土している。形態・大きさは所謂「ぐい呑み」状で、成形も他の坏や高台付坏、皿が大量生産された様な作り様を示すのに比して丁寧な作りでよく研磨されている。また、内外面とも黒色処理されている。

### 三

第3号土壙から6点が出土している。内湾気味に広がる体部に厚い底部が張り出して付く形態を取る。調整は内外面とも撫でによっている。底部は磨滅の激しいものもあるが、すべて回転糸切りによるものと思われる。法量は、口径が9.5~10.9cm、底径が4.5~5.4cm、器高が2.4~2.9cmを測る。

#### 灰釉陶器

灰釉陶器には高台付塊、高台付皿、段皿、長頸瓶がある。

#### 高台付塊

高台付塊は第2号土壙から2点、第3号土壙から1点の計3点が出土している。3点とも形態・大きさ・技法が異なっている。

#### 高台付塊A

第2号土壙から出土している。底部から内湾気味に立上がり。口縁部内面に1条沈線を巡らし、体部と画している。調整は、底面が糸切りの後笠削り、高台内側は撫で、坏部下半は笠削り、上半は撫である。釉は白っぽい淡緑色である。法量は口径が16.5cm、底径が9.4cm、器高が7.1cmを測る。

#### 高台付塊B

第2号土壙から1点出土している。底部から内湾気味に外方に広がる。調整は底面糸切りの後笠削り。坏部下半も笠削りによっている。釉は透明釉で、部分的に淡緑色を呈している。法量は口径が14.7cm、底径が7.2cm、器高が5.4cmと高台付塊Aよりも小形である。重ね焼きの痕跡が認められる。

#### 高台付塊C

第1号土壙出土の高台付塊は、底部から内湾気味に立上がり、口唇部で外反する。断面が三角形の小さい高台が付く。調整は体部下半が内外面ともに撫でで、底面は糸切り後笠削りが施されている。釉は白色を呈する。法量は口径が14.1cm、底径が7.0cm、器高が4.3cmを測る。

#### 高台付皿

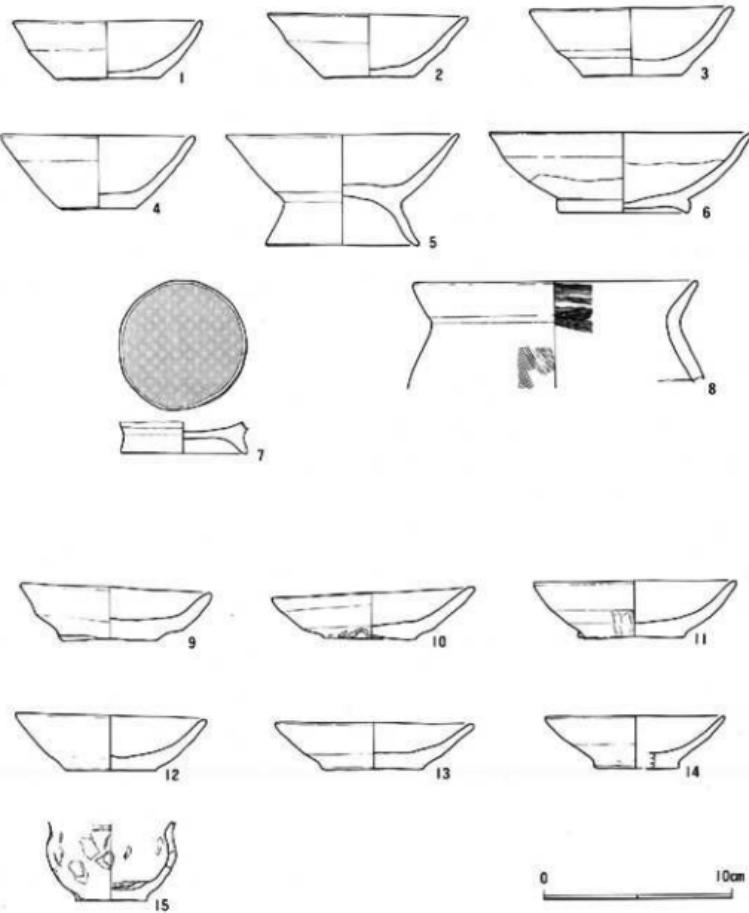
第2号土壙から1点が出土している。底部から内湾気味に大きく広がる。底面は糸切り後撫で消している。釉は淡緑色で漬け掛けしている。法量は口径が11.9cm、底径が5.9cm、器高が2.6cmを測る。

#### 段皿

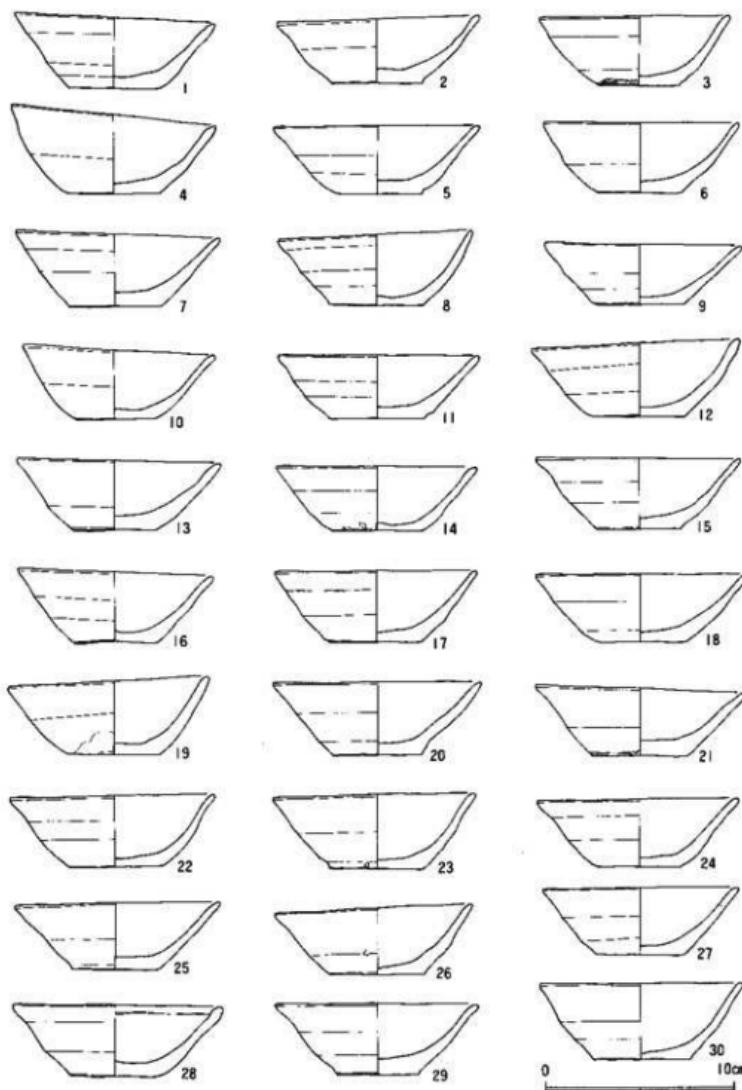
第2号土壙から1点が出土している。底部から段を持って外方に大きく開く。高台部はやや内湾気味である。釉は淡緑色から白緑色で、漬け掛けしている。法量は口径が15.2cm、底径が8.9cm、器高が3.2cmを測る。

#### 長頸瓶

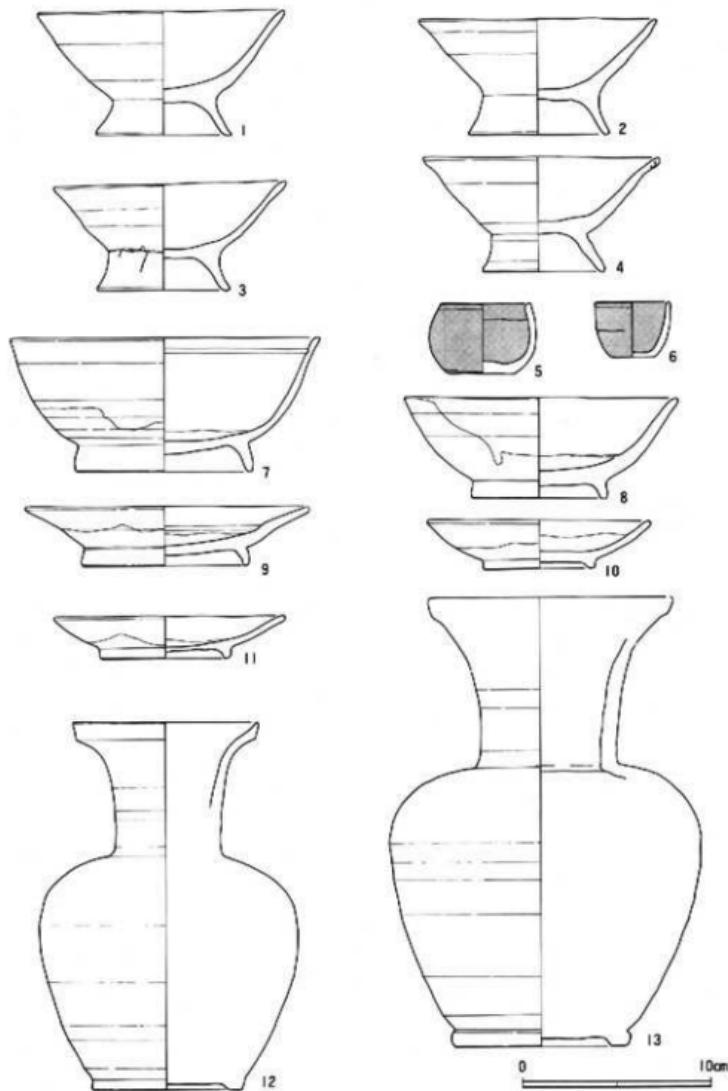
第2号土壙から2点が出土している。どちらも胴部最大径は肩部にあり、直立した頸部から広



第24図 第1号土壤(1~8)・第3号土壤(9~15)出土土器(1/3)



第25図 第2号土塗出土土器(1) (1/3)



第26図 第2号土壙出土土器(2) (1/3)

がって、棱を持って立上がる。大きさは異なり、大きい方の法量は推定口径17.0cm、底径9.2cm、推定器高24.0cm、小さい方の法量は口径が10.0cm、底径が8.0cm、器高が19.6cmを測る。

### 第3節 鉄製品とその他の遺物

#### 鉄製品（第27図1～31、第28図1）

今回の調査で得られた鉄製品は32点で、その内訳は鉄剣の破片7、刀子5、鉄鎌14、紡錘車1、鉄釘3、筒状鉄器1である。得られた資料のほとんどが破片のため全容を窺い知ることのできる資料は少なく、鉄剣の破片中には同一個体と思われるものもあることより、破片の数が即個体数を表わしているとは言えない。また、全体的に銹化が著しい資料が多いことより、形状の細部に亘って観察ができず、形状分類ができるない資料があった。

今回出土した鉄製品で遺構との共伴関係が明確になっている資料は少なく、後世の墳丘削平時に散乱した状態の出土分布を示し、鉄製品が埋納された状況を物語るものは土壤出土のものを除いてなかった。

鉄製品は古墳時代（鉄剣・刀子・鉄鎌）、平安時代の土壤に伴うもの（紡錘車）、所属不明のもの（鉄釘・筒状鉄器）に大別することが可能である。

鉄剣（第27図1～7） 鉄剣の破片が7点出土している。部位別にみると刃身部破片4点、茎3点である。1はF-3、2はE-5、3はE-2、4は表採、5はF-1、6はF-2、7はD-0からの出土である。

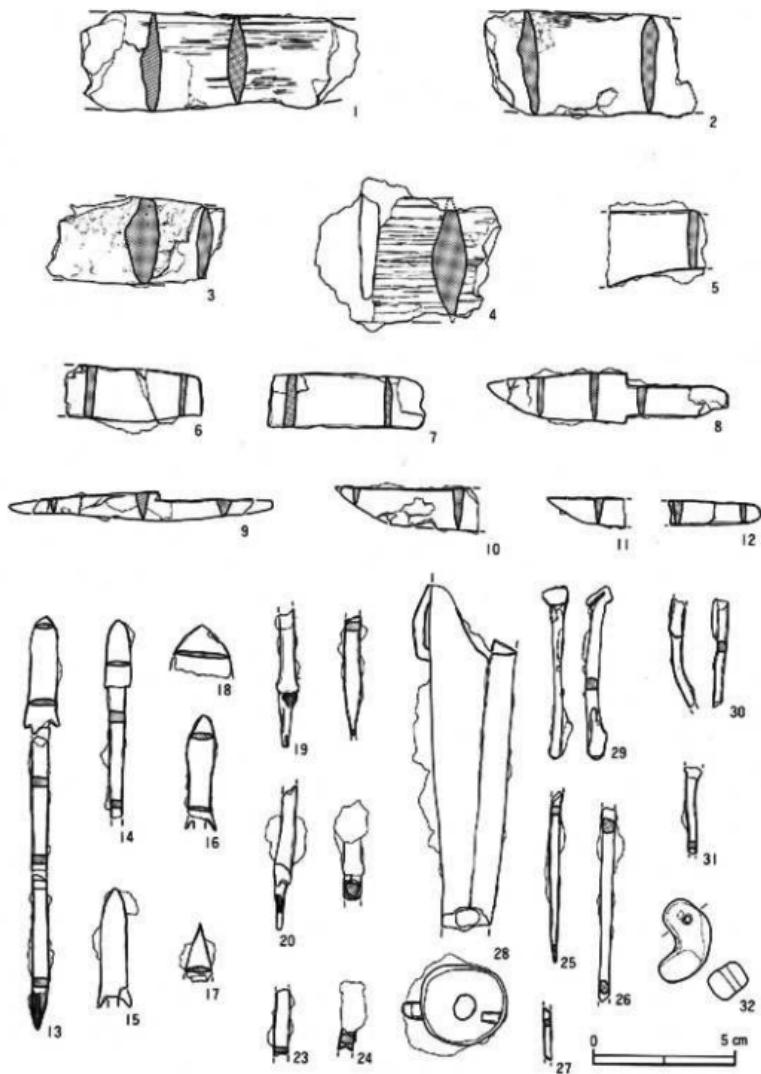
刃部は断面形が凸レンズ状を呈するものがほとんどで、厚さは0.6～1.2cmであるが、厚味をもつものは鞘におさまっているもので、鞘の厚さを勘案すると0.6～0.7cmの刃厚が推定できる。刃部幅は3.0～4.5cmまで様々である。刃部幅より刃身部のどの位置に相当するのか推定してみると、1は刃部幅最大で3.5cm、最小3.0cmであることより鋒に向かって先細りしている状況がわかる。4は最大幅が4.5cmと広く、鋒に向かわると思われる金具が刃身に直交しており、茎部に近い部分と思われる。その他は刃部幅値に差がないことより、刃身部中程の破片と考えられる。

鞘と思われる柾目の木目痕は1・2・4に認められる。3は木質のものではなく異質な材が付着している。

鋒先と明確に確認し得た資料はないが、18は鉄鎌の先端にしては幅2cmと幅広で、鋒先とも思われるが、厚味が0.2cmと薄い点に問題がある。

茎部は3点確認され、厚さ0.4cmで断面形が長方形である。5は開部に向かって片側が緩やかに広がることより片開となる可能性が強く、鉄剣の茎部ではなく直刀の茎部である可能性がある。6・7はその形状より両開になるものと思われる。両者共に釘穴はみられない。

破片だけの出土で剣形等については把握することはできなかったが、刃部幅断面等より考えると大振りの刃身をもつ鉄剣は考えられず、一時坂古墳の例等より全長60～70cm前後のものが推定できようか。



第27図 鉄製品(1)と玉類 (1/2)

刀子(第27図8~12) 刀子は茎部破片まで含めると5点が出土した。全容を把握し得るもの2点、刀身2点、茎部1点である。8はM-9、9はD-0、10はF-104、11~12はJ-9の出土である。

全容を把握し得たものの形状をみた場合大きな差がみられる。8は鉋元に明瞭な両側を有する。刃部幅は1.7cmを測り、割合幅広で切先部は鋸切先状となる。棟側は平棟となる。10~11は刀身だけで詳細なことは不明であるが、刃部幅があることなどより8と同じような形状を呈するものであろう。9は棟側は直線的であるが刃部が減幅する細身の形状をもち、棟側に闇を有する。茎部は割合長く、関部よりやや外反り状となる。

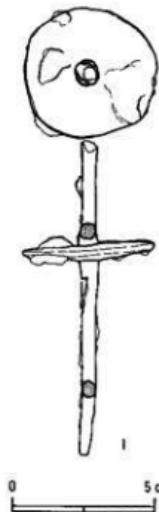
鉄鎌(第27図13~27) 総計15点が出土した。内訳は鎌身部から笠被部までがほぼ確認できるものの2点、鎌身部だけのもの4点、笠被部破片9点である。全体的に腐食が著しく細部確認のできる資料は少ないが、鎌身部幅1.0cm前後、小さな逆刺をもつものが主体をなし、側縁が外反するもの(17)と内反するもの(13~16)がある。一時坂古墳の鉄鎌と比較すると鎌身部がスマートな柳葉形を呈している。笠被部は全く長頭となり、断面形は長方形となる。13~24はJ-9、25はH-9、26はI-9、27はJ-7の出土である。

紡錘車(第28図1) 1点が2号土壙より出土した。輪・軸が一体で、軸の先端末端が欠損している。輪部の断面に特徴をもつ。輪部の片面が内湾し、もう片面が外湾する形状である。軸の断面形は丸状を呈し、輪部とのソケット部はやや太目となっている。

鉄釘(第27図29~31) 3点が出土しているが、頭部の確認ができたものは2点である。伸ばした板状の頭部を脚部に付くように折り曲げる形状をとる。29はJ-103、30はJ-7、31はI-11の出土である。

筒状鉄器(第27図28) 板状の鉄を筒状に巻き、柄部とのソケットに用いられたものと思われるもので、内面に木質痕や目釘がみられる。E-106の表土層からの採集品である。

以上のような器種の鉄製品が出土している。古墳時代の鉄製品は鉄劍・刀子・鉄鎌であり、量的に多いとは言えない。この鉄劍・刀子・鉄鎌が副葬品と考えると、諏訪地方で同期の古墳であるフネ古墳・片山古墳・本城1号・2号墳、一時坂古墳等の副葬品が直刀・鉄劍・刀子・鉄鎌であるのに対し、孤塚古墳では直刀を欠除している。また、細部に亘ってみると鉄鎌の形状に特徴がある。鎌身部が長く細身で側縁部が内反し薄の穂形となり、逆刺部・長頭・短頭の差を除けば一時坂古墳で出土している劍身形短頭鎌の鎌身部と形状的には類似している。



第28図 鉄製品(2) (1/2)

鉄製品、特に古墳時代の武器について概観してきたが、出土点数が少ない点、出土状況が明確でない点などより、全体構成の把握までには至っていない。

玉類(第27図32) ヒスイ製の勾玉が1点出土している。長さ3cm、重量9gの割合小形のものである。製作状況は割合粗雑で、研磨が全面にいきわたらず調整痕を残す。頭部は割合小さく全体形状はL字形に近い。穿孔は片側より穿たれている。K—103からの出土である。

第V章 考 察

## 第1節 出土遺物について

## 古墳時代の土器について

本遺跡からは、第1号古墳、第2号古墳の2基の古墳が検出されている。その内、第2号古墳は造成工事中の遺物出土である。

第1号古墳は、周辺内からの遺物の出土状態が、各個体毎にまとまっているものの、細片になつての出土であり、埋没時にすでに破壊されていたと考えられる。また、第2号古墳は、遺物の出土状況は明らかでないが、破片が第1号古墳のものに比して大きく、埋没時には完形のままであった可能性がある。

両古墳からは多くの遺物が出土しているが、出土した遺物を各器種毎に比較すると、各古墳によって若干の土器組成の違いが認められる。

高环はA～Fの6種に分類したが、第1号古墳から出土したのはB・C・D・Eの4種、第2号古墳から出土したのはA・C・Fの3種で、双方の古墳から出土しているのは高环Cだけである。高环BとCについては、同じ系譜を引く高环と考えられるが、高环Bが大形で环部底面にまで箒磨きを施しているのに比して、高环Cが小形で环部底面の箒磨きが行われないものも多く見受けられる。同じ系譜の中で、小形化と箒磨きの省略が行われた結果と理解したい。同様に高环Dと高环Fについても小形化の傾向を見て取れよう。

壺はA～Eの5種に分類したが、第1号古墳からは壺A・B・D・Eの4種、第2号古墳からは壺C・Dの2種が出土しており、双方の古墳に共通するのは壺Dだけである。壺Eは所謂小型丸底土器の系譜を引くと思われるが、第1号古墳からしか出土しておらず、次の段階に当たると考えられる壺Dの所謂埴形土器が双方の古墳にみられる。同じ壺Dでも第1号古墳の埴形土器に比して第2号古墳の埴形土器の方が体部が球形で、口縁部が長い傾向を示すなど、より新しいタイプになると思われる。

以上のような土師器の各器種の中で、高环はB及びDからC・Fへ、壺EとDの共存から壺Eが消滅して壺Dだけにという傾向が認められた。また、第1号古墳に存在しなかった須恵器が第2号古墳から出土しており、土師器、須恵器の双方から第1号古墳から第2号古墳へという系譜が窺える。ただし、第1号古墳から出土した高环Eについては、両古墳出土土器の中ではやや新しい傾向を示すと思われる。発掘調査時における所見、出土遺物などから第2号古墳の方が第1号古墳よりも新しいと考えられるが、高环Eが第1号古墳から出土している点を考えると、その差はあまり大きいものではなく、さらに、古墳構築後にかなりな期間、墓前祭等が行われ、より新しい遺物が出土する結果になったものと思われる。

諏訪地方における同時期と思われる古墳を見ると、同じ守屋山系に諏訪市のフネ古墳、片山古墳、本城遺跡第1号墳・同2号墳（文献1）があり、諏訪湖をはさんで対岸にある一時坂古墳（文献2）もほぼ同時期と考えられる。

本遺跡の両古墳の土器群には、若干の時期差が考えられたが、どれも前述の諏訪地方の同時期と考えられる古墳に与えられている5世紀末から6世紀初頭の時期に含まれるもので、その時期内での細分にすぎない。また、他の古墳ではここで細分した遺物が共存している場合も少なくない。今後の資料の増加を待つところである。また、諏訪市の一時坂古墳以外は諏訪大社上社前宮の周辺にあり、諏訪大社の発生との関係が言及してきた。その反面、この年代の集落は諏訪地方では確認されておらず、これら古墳群を構築した人々の生活実態がつかめないままでいる。おそらく諏訪大社上社を中心とした地域に集落があるものと思われるが、注意してみていただきたい。

## 2 平安時代の土器について

平安時代と考えられる遺構に、第1～3号土壙がある。土壙と見えられ、どれも隅丸の長方形を呈しており、多くの遺物を出土している。遺物の出土状態も、第1・第3号土壙が北側、第2号土壙が南側と、長軸の一方に遺物の出土が片寄るなどの共通点が見いだせ、副葬するにおいて、頭部または足部にまとめて埋納した様子が窺える。遺物についてみると、灰釉陶器などの東海地方からの搬入品がある一方で、ほぼ同じ規格で、ゆがみが大きく雑な作りの土師器が多く出土している。それらは磨きなどの調整は施されておらず、特に使用痕も認められない。どちらかというと、土壙に埋納するために作られたような感がある製品である。

第1号土壙及び第2号土壙については、壺及び高脚状の高台付壺の形態が同じであること、どちらも灰釉陶器を共伴することなどにより、ほぼ同じ時期と考えて良いものと思われる。

第3号土壙は灰釉陶器が出土しておらず、土師器も出土した遺物を見る限りでは壺が出土しておらず皿ばかりであるため、やや新しくなると思われるが、第24図9が第2号土壙出土のものと接合しているなど、きわめて近い時期の可能性も多く残されている。埋納されるについて、器種の選択を行っているだけかもしれない。しかし、第3号土壙の皿は、第1号・2号土壙の壺から、本遺跡西側丘陵下にある、茅野市宮川高部の高部遺跡（文献3）25号住居址、第35号住居址にみられる底部が厚く、高台が付いているかの感を与える底部を有する皿への過渡期と考える見方が一般的である。<sup>(注1)</sup>

土壙の年代については、第1・第2号土壙が須恵器及び黑色土器の出土が認められず、土師器と灰釉陶器だけになっている点から11世紀の前半に、第3号土壙が灰釉陶器や土師器の壺がなくなり皿になっている点からやや新しい11世紀の中ごろになるものと思われるが、前述のように第2号土壙出土の遺物が第3号土壙のものと接合している例もあるため、今後住居址などでは第3号土壙の皿が第2号土壙の時期にセット関係として共伴する可能性もある。集落跡での出土のあり方に注目したい。

- 注1 本遺跡については、既に『茅野市史』上巻に於いて概略を報告しており（文献4）、土壤出土の遺物についても、編年的位置についていくつかの論考がみられる（文献5・6）。
- 文献1 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会 1974 「本城遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市 その3—』
- 〃 2 白田 武正 1986 「第2章古代の集落」『茅野市史』上巻
- 〃 3 諏訪市教育委員会 1988 「~時坂~長野県諏訪市一時坂遺跡第1次発掘調査報告書~」
- 〃 4 茅野市教育委員会 1983 「高部遺跡~静香庵進入道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書~」
- 〃 5 鈴柄 俊夫 1988 「信濃における平安時代後期以降の土器様相」『東国七器研究』1号
- 〃 6 原 明芳 1988 「長野県の9世紀後半から12世紀の食器具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

## 第2節 狐塚遺跡の性格について

### 1 狐塚古墳と諏訪地方の古式古墳

フネ古墳の発見 諏訪地方の古墳の築造された年代については、藤森栄一の業績がある。昭和14年代のその成果として、要約すると古墳最末期の7世紀に属する古墳がほとんどである。一部8世紀に降る古墳もあるとしている。

第二次大戦後、昭和34年、諏訪市大熊小字船地籍において、青銅鏡、鉄劍、鉄刀の発見があり、引きつづき調査が行なわれた。<sup>(1)</sup> その結果、主体部は削竹形木棺形式の、狭長な主体部二基並列の古墳である。副葬品は小形変形獸文鏡、玉類、青銅鏡、蛇行劍、鉄劍、素環頭太刀、鉄刀、鉄鎌、鉄斧、ノミ（タガネ）、ヤリカンナ、鎌等である。土器類については全くみられず、のちの整理中ただ一片の無文須恵器小破片があつただけである。

墳形については主体部の周辺にやや盛土があったとみられる程度の高まりがある。地形測量では北方に突き出た丘陵上の、ほぼ中央に主体部が位置することが判明した。地形全体をみると、北方端は方形となり、東西側は急な斜面、南方は背後の赤石山脈に連なる。この地形図から、墳形について不明であると報告した。当時墳形については、方形になるのではないか、南西側に周邊がありはしないかと考えたが、それ以上の調査はできなかった。

フネ古墳の概要でしられるように、山上に築造された竪穴式で、粘土被覆形式の二基並列する主体部、副葬品は從来、諏訪地方古墳にみられなかった古式副葬品。諏訪地方に通有的な副葬品とみられる馬具がない。水晶切子玉・金環もみられない。等々、從来の諏訪地方古墳觀を変革させた古墳であった。

### 岡谷市渕塚古墳の再検討 糖塚古墳については、昭和10年岡角守一により紹介された。<sup>(2)</sup>

フネ古墳の発見と調査により、上社周辺地域に古式古墳の偵索の目が向けられ、大熊片山古墳をさがしだした。一応の試掘を行ない、検討の結果、フネ古墳に類似する形態で、かつ出土品からみて、後続する古墳と考えた。そうなると、概出資料の再検討と、聞き込み調査を行なった。諏訪考古学研究所（藤森栄一主宰）では、まず概出資料で報告されている糖塚古墳。聞き込みで鉄劍・須恵器・土師器の出土のあった茅野市狐塚古墳。諏訪市神宮寺片山地籍。同市神宮寺入込

畠。同市大熊湯の上(片山)地籍。同市大熊新城地籍などが集約されてきた。いづれも上社前宮・本宮の鎮座する西山方面である。

糖塚古墳は、このような見方から両角論文の検討を行なった。その結果、地形は自然丘陵の突端で、丘陵上に小坂区鎮守御社宮司社があり、その下が主体部とみられる。昭和2年たまたまこの墳上で青銅鏡・勾玉・管玉・小玉・土師器破片が、少年により発見された。発見者の聞きとりによれば、出土品の下層に盤状の石があるという。両角の見解によれば、組合せ石石棺の存在を予見している。しかし、丘陵上において少年の遊び中発見された出土品というのは、比較的浅い土層から発見されたものとみるのが常識であろう。これらから、次のような結論が出された。

- 1 墳形は、丘陵端を利用しているが、上に御社宮司社があり、詳細は不明確である。
- 2 内部主体は、石室の可能性は少なく、竪穴式の無石櫛墳とみられる。
- 3 青銅鏡は彷彿の変形六歌鏡とみられ、派生地方としては稀少例で、フネ古墳の副葬青銅鏡に前後し、7世紀には降下しないだろう。
- 4 勾玉は、後期古墳に副葬されている「コ」の字形というより「C」字形に近く、古墳後期には降らない勾玉とみられる。

以上の見解から、糖塚古墳はフネ古墳に類似する。そして後続する時期の古墳であろうと考察した。

戸沢充則氏は、岡谷市史のなかで、糖塚古墳の編年的位置を、フネ古墳（五世紀後半としている）につぐ古墳で、6世紀前半としている。<sup>(4)</sup>

片山古墳の発見と調査 昭和31年頃、諏訪市大熊湯の上(片山ともいう)の畠で、鉄刀・勾玉を採集した話を聞き、フネ古墳に近い丘陵上であることから、採集者の後藤孔氏を訪ねて詳細を聞いた。

出土品を検討すると、鉄剣・鉄刀・鐵錐の破片、管玉・小玉などで、地主が勾玉を採集しているという。これらの出土品からフネ古墳に類似する古墳であると考えた。

昭和43年秋、同一地主の畠の西櫛より約7m東側にて、鉄刀2本、鉄剣1本、鐵錐2本、勾玉1個が発見された。後藤が現地に行き、採集すると、鉄刀1本、青銅鏡1枚、管玉1個を得た。したがって此處にも櫛の存在を認め、発掘調査を行なった。

発掘調査は昭和44年3月実施。東櫛部分の様相は、表土下約60cmで、黒土層中にローム土を混じた硬い水平面がある。この上に約1cmの木炭粉末層がある。この木炭粉末層の規模は、幅約3.5m、長さ南北約7mで、隅丸長方形とみられる。この木炭床のほぼ中央に幅1.0m、長さ約2.3mの木炭のない部分があり、ここが棺床部分とみられた。周辺から鐵錐3本と管玉1個の発見があった。木炭床の下層は黒土層となり、ローム層までは約1.5mの深さであった。

西櫛の南西方向に石積が発見され、東櫛の南方にまで続き、それは両櫛の南西外側に葺石のあることが確認できた。葺石の並び方は円又は隅丸方形のように観察されたが、大雪と土の排除困難のため、全体観は把握できなかった。

昭和57年、片山古墳上に市上水道貯水タンク建設に伴う、緊急発掘調査が実施された。<sup>(4)</sup> 概要是主体部はすでに発掘、耕作で出土品はみられなかった。墳丘直徑約24m、葺石は南から東側に半円形に、周溝底から約1mみられた。墳丘頂部の高さは、葺石上辺から約30cmで、ほとんど平坦であった。東西両郴は、ほとんど露出した状況であったとみられる。

副葬品の出土は数回にわたり、しかも耕作中の器物もあり、鉄劍と鉄刀については東西郴に分類しがたい。東郴出土副葬品は、鉄劍・鉄刀・鉄鎌5本・青銅鏡・メノ・勾玉・管玉。西郴は鉄劍・鉄刀・鉄鎌・ヒスイ勾玉・管玉・ガラス小玉・土製紡錘車である。

青銅鏡は小形無文で三圍の四文がある。鉄劍は短剣と長剣がある。鹿角柄をつけたものもある。鉄刀は平様平造脛切先で、いづれも内湾する。全長92cmの大刀もある。鉄鎌は両郴の出土とも、両丸造脛抉柳葉式である。

古墳に伴うとみられる土師器・須恵器は、明確に判らない。周溝内南方で発見された土師器甕の時期は未定である。

主体部出土の鉄劍・鉄刀からして、フネ古墳に類似する。鉄鎌の新しい形式の出現は、一時坂古墳と比較し、相対的に古式とみられる。これらのことから、消極的な資料検討となるが、フネ古墳と一時坂古墳の間に位置する古墳と考察している。

本城遺跡周溝墓・古墳 諏訪市湖南本城遺跡は昭和49年に発掘調査が行なわれ、この際2基の周溝墓と2基の古墳が発見された。遺跡立地は湖盤を見下せる丘陵上にあって、弥生時代から古墳時代にかけて小規模ながら集落が続いている。

周溝墓は方形と円形周溝墓で、周溝規模は同程度であり、主体部土壇には副葬品はなかった。周溝内出土品から両周溝墓とも五領期と報告されている。

一方、1号古墳は円形の周溝をめぐらし、周溝内のローム層上に、土師器高坏を器台のようにして、环・塙等をのせて配列していた。主体部は黒土層中であって塙の形は確認できなかったものの、直刀・勾玉・鉄鎌の配列がみられ、木棺直葬形式の主体部と考察された。1号古墳の時期は、周溝内の土師器から、5世紀末（和泉II式相当）の時期を考えている。2号古墳の周溝は円形で1号古墳周溝とはほぼ同程度。周溝内から古式須恵器甕が出土した。主体部は不明である。2号古墳の時期は須恵器甕を、須恵器第1型式として報告されたので、5世紀末から6世紀に相当しよう。

本城遺跡の周溝墓と古墳の関係は、直にいえないが、周溝墓が古墳時代まで築造されており、時間的には降るが1号墳・2号墳が築造されてくる。しかし本城周溝墓の築造される時期には、フネ古墳の築造、あるいは県内古式古墳の松本市弘法山古墳（4世紀後半）等の築造がみられる<sup>(5)</sup>ことから、周溝墓と初期古墳の同時築造という時期のあったことは明らかである。

1号古墳の周溝内にみられる土師器の配列による祭祀形態の発見は、その後、諏訪市元町一時坂古墳においても発見された。筆者は本城1号・2号墳を、周溝墓の範疇でとらえようと考えたことがある。今は取下げ古墳とし、周溝内祭祀の一つのパターンとして取上げるものである。

一時坂古墳と周邊内祭記 諏訪市元町の福沢川北岸の舌状台地先端に築造された古墳である。<sup>(9)</sup>  
一墳多葬形式といえる古墳で、古墳の直径約14m。墳頂上は約13×10mの広さで、そこに6桟、  
7棺の主体部の埋葬を考察した。副葬品は鉄劍2本、鉄刀（内湾）8本、鉄鎌（腸抉柳葉形式）  
143本。刀子14本。玉類（勾玉3個、管玉15個、ガラス小玉186個）がある。

墳丘の築造は丘尾を切断した形で、山（東）側に深い周溝を掘り、墳丘山（東）側に葺石を貼  
っている。周溝は広い部分で上縁約5m、深さ約1.20mあり、丘陵先端を利用した粗放的な墳形  
で、隅丸方形とも、梢円形ともみえる。

出土遺物では、周溝底に3群の完形土器をセットで配列している。また墳丘上西部と周溝東側  
上部にも2群の土器集中が認められ、土器配列が想定された。このことは本古墳では、土師器・  
須恵器が副葬品に使用せず、埋葬時に行なわれた墓前祭と考えられる。

主体部は県下古式古墳の主体部の平均値を準用し、鉄劍・鉄刀・鉄鎌等をグルーピングし、棺  
と推定した。刀・劍・鉄鎌の出土した方位から、南北方向に置かれた物8本。東西方向は2本と  
なる。また出土レベルをみると、約10cmの差があり、2群に分けられる。

これらの調査結果から、墳丘規模はフネ古墳、片山古墳と同規模の大きさである。墳形は整った形を意識せず、丘尾切断利用で、正円ではない。葺石の築造も山側に貼り、周溝も山側に半円  
に掘るのは、片山古墳に類似している。主体部は木棺直葬とみられ、フネ・片山古墳の粘土桟  
形式、本城1・2号古墳の木棺直葬形式に近いものである。副葬品はフネ古墳を例外外に、片山・  
本城1・2号、清水窪古墳例と同様、鉄劍・鉄刀・鉄鎌・玉がセットになり、1棺あたりの数量  
は少ない。

時間的には、周溝内出土土器類から5世紀後半ないし6世紀初頭と考えられる。

一時坂古墳で注目されるのは周溝内における土器類の配列で、すでに発掘報告された本城1号  
古墳の、周溝内における土器類の整然たる配列の墓前祭視が、一過性のものでなく、当地方古式  
古墳に実施された墓前祭式の一つであることを証明したのである。

狐塚古墳の墓前祭のあり方 狐塚古墳で2基の古墳の発見がある。1号古墳は、ほぼ全面発掘  
を行なった。その結果は前項に詳細に述べられている。主体部は耕作による擾乱で不明であったが、黒土層中に埋設された主体部とみられる。副葬品とみられる器物は、勾玉と鉄劍破片、鉄鎌・  
刀子破片が僅かに発見された。墳形は北西に延びる尾根の中段の頂部に、自然地形を利用し、山  
側（東南）に周溝がローム層まで掘られている。墳丘は南側で地山まで削り出し、地形の低くなる  
北方は削り出したロームを盛土して、墳丘を形成している。したがって墳丘は正円形にはなら  
ず、12×19mの大きさである。

墳頂部には土器類はみられなかった。土器は南側の周溝内から出土した。出土状況は周溝内に  
ある程度土砂の埋没した時点で、墳丘斜面から底部にかけ、ことごとく細かく破碎された状況で、  
散布されていた。

散布された状況としても、高环を主に、壇、壠があるまとまりをして重なり合って発見されて

いる。高坏Eについては、新しいタイプの土器とされ、1号・2号古墳中でもっとも後出する土器であるが、1号古墳周溝中より出土している。このことはある程度の時間幅をもって、周溝内における祭祀の行なわれたことを証するものだろう。それにしても、1号古墳の周溝内における墓前祭のあり方は、本城1号古墳・一時坂古墳にみられる、完形の高坏を器台に、その上に埴を中心とした壇・坏など並べ、食物供饌を行なったあり方とはまったく異なる祭祀方法といえよう。

周溝内にある程度土砂の堆積してのち、土器を破碎して散布しているが、古墳築造時より、時間的に経過した時点で周溝内祭祀が行なわれたとみなければならぬ。

2号古墳は、1号古墳北側に位置し、周溝中に土器群が存在したとみられる。出土土器類は、1点の中型の須恵器壺のほかは、土師器の高坏・壇・埴・坏等である。出土状況から完形品で周溝内にあったものとみられ、となると、完形土器の周溝内配列祭祀の可能性が強い。

狐塚古墳は、同型式土器内のうちで、1号古墳から2号古墳へという時間差が考えられるとしている。両古墳とも主体部は不明であったが、かつて鉄劍・鉄刀が耕作で発見されている。いづれかの古墳主体部に伴うものだと考えられる。

二形態の古墳祭祀 諏訪地方古墳第Ⅰ期のフネ古墳型古墳として把握される古墳のパターンをあげたことがある。ここでそれを補足した。

- (1) 丘陵末端又は丘陵上を利用して、丘尾切断形が多い。
- (2) 墳丘の山側に周溝を掘り、山側に葺石を有する古墳もある。
- (3) 主体部は墳丘上団に、粘土被又は木棺直葬形式で施設される。
- (4) 創葬品は鉄劍・内弯する鉄刀・尖根形式の鉄鎌・勾玉・ガラス小玉である。
- (5) 周溝内を主にした墓前祭祀が行なわれるが、完形土器を整然と並べる方式と、土器を細かく破碎する方式がある。

フネ古墳型古墳として類型化した古墳は、諏訪地方の第Ⅰ期古墳である。<sup>註</sup>その形態からみて、周溝墓の系譜を引く墓制であると見解をのべた。例えば主体部の方位の傾向をみると、南信濃の周溝墓の大勢は西北である。そのなかで5世紀代に入る本城遺跡の周溝墓は北になってくる。一方竪穴式系古墳の主体部方位をみると、フネ古墳の二基の主体部は北東。片山古墳は北北西。一時坂古墳の主体部の多くは、北になっている。当地方の横穴式石室古墳の石室方位は、ほとんど北になるが、竪穴式系古墳も、時代が降ると北方位になる傾向がみられる。この事もフネ古墳型古墳のなかで一つの傾向として見なければならない。

さらに狐塚古墳の調査で確認した、周溝内における墓前祭祀のあり方は、1号古墳にみられる土器の破碎・散布状のあり方と、2号古墳にみられる、完形土器の配列された祭祀のあり方、という二形態の方式の把握である。

5世紀末から6世紀初めにかけての土師器を破碎し、散布するという方式の祭祀は、古墳築造時より時間が経過してから行なわれており、新しい知見では、フネ古墳の試掘調査において、未

検討ながら、同一例と考えられる資料が得られた。一方の周辺内に整然と並べられる方式は、前述したように、本城1号古墳・一時坂古墳にみられるものである。

いま、同一土器形式内とみられる、5世紀代後半において、二つの墓前祭祀の形態がある事が明らかになった。これがいかなる政治的背景をもつものか、また時間差を持つのか、今後研究を要する問題を提出したのである。

諫訪市清水塚古墳 昭和39年住宅工事中に、鉄刀と鉄鎌の発見があった。<sup>33</sup>

立地は西方に伸る小丘陵上である。主体部は浅い層と、黒土層中に埋設されていたらしく、不明であった。

出土品の鉄刀は、内弯する平棟平造。鉄鎌は腸抉柳葉形式で、平丸造であった。

古墳立地、副葬品とみられる鉄刀、鉄鎌の出土状況からして、フネ古墳型古墳の範疇に入る古墳であることは確実である。

フネ古墳型古墳の発見が、いわゆる上社所在地の西山に続いたが、一時坂古墳の発見、そして手長丘古墳時代祭跡<sup>34</sup>、清水塚古墳の確認と、湖盆東線に分布することが判ってきた。今後この地域に発見される可能性があるものとみられる。

諫訪地方の第Ⅰ期古墳 フネ古墳型古墳の発見、発掘調査が増加し、資料の集積ができつつある。資料の整理分類をなし、第Ⅰ期古墳の編年<sup>35</sup>の編成、分布図とその築造の背後集団の研究が求められる所である。

フネ古墳の被葬者がすでに、立地、副葬品から上社関係の人物と想定する考え方もある。少なくとも、横穴式石室古墳の築造以前の、特殊な葬法として、周溝墓の系譜を引きつぐ古墳であることは確実である。

つまり、山上に築造される豊穴系木棺直葬墓と、山麓・台地に築造される横穴式石室古墳という、墓制的一大転換があったことは事実である。その事実が在地豪族守矢氏と、新来の支配者の交替の、神話伝承と反影したものではなかろうかと述べたことがある。<sup>36</sup>さらに進んで、古諫訪(上伊那を含む)における、祭政的な統一をなした司祭者の人物であろうとも述べた。<sup>37</sup>

フネ古墳の発見、そしてその系譜につらなる第Ⅰ期古墳の集積は、古諫訪地上の古代史上、上社発生の問題を含む重要な資料といえる。今後一層、Ⅰ期古墳の実態を解明することと、発掘においても注意すべき古墳である。

資料の集った第Ⅰ期古墳における編年案について試案をのべたことがある。<sup>38</sup>

フネ古墳一片山古墳—狐塚古墳—糟塚古墳としたもので、当資料分析は弱かった。

今日の考え方は、資料としての土師器・須恵器の時期は、狐塚古墳・本城1号墳・一時坂古墳とも、5世紀末(和泉II式期)の土器とされている。青銅鏡についてはフネ古墳・糟塚古墳・一片山古墳の三例であり、この順に考えられる。鉄刀はいづれも内弯する形態であるが次第に直刀に近づくと考え、フネ古墳・一片山古墳・本城1号墳と一時坂古墳の順が考えられる。鉄鎌は一片山古墳出土の腸抉柳葉形式を指標にして、フネ古墳・一片山古墳・一時坂と清水塚古墳の相対的時間幅

を考えたい。

あと問題は周溝内祭祀のあり方、土器の破碎散布の仕方と、高坏を器台に整然と配列される仕方の意味についてである。時間差による祭祀のあり方なのか、被葬者あるいは背後集団の墓前祭祀のあり方の差であるか、今後の研究にまちたい。

狐塚古墳周溝内の土坑 古墳の周溝内に土坑の伴う例が確認された。1号古墳の南西部コーナー底部に作られたもので、比較的大形の土坑である。長軸方向は東北東である。

周溝墓と占墳周溝内に作られた土坑については、注目して取りあげたことがある。その性格はまだ充分解明できない。本体の被葬者に系譜のつらなる人物の墓、動物供儀、供献品を埋めた墓など考えたが、証明出来る出土品はみられない。本土坑には炭化材、炭化物の混入が報告されており、今後の同例の資料をもって論考したい。ただ考えの中には、最近保存整備のため発掘調査された、森将軍塚古墳（4世紀末とされる）において、前方後円墳の葺石下方に、数多くの組合せ式石棺墓、埴輪棺墓の発見がある。<sup>3</sup> その性格はまだ充分に解明されていないが、前方後円墳被葬者の系譜につらなる人々の墓、という考え方にも魅力をもつものである。森将軍塚古墳例をあげてみたが、参考にして、今後の研究にまつべき資料である。

## 2 その他の問題

平安時代の土壙墓についてはここでは述べる余裕がない。吉田川西遺跡例と類似するとみられるが、狐塚例の方が副葬品の質、量が劣るようである。しかし当地方としては豪華な副葬品であることは注目されるところである。

狐塚古墳の所在地は「峰 湛」と呼ばれる所で、中世文書のなかに「峰湛神主」の名があり、湛神事の行なわれた場所で、現在古木である大桜の樹がある。峰湛には古い道が通じていて、神使殿（おこうどの）の一行が、巡湛神事のさいここを通って前宮に帰着するなど、古代・中世の諏訪神社上社神事に欠くことの出来ない場所であった。また東の扇状地には大祝の神殿館があり、また前宮社もある。西側の下馬沢川扇状地は、守矢神長邸の外、五官祝の居住地であり、遺跡としても、绳文、平安時代集落址である。さらに上社神事に欠くことの出来ない磯並社と、巨石の小袋石もある地帯である。この扇状地を区切る丘陵上に狐塚古墳、平安土壙墓が作られているが、大祝・守矢神長等、諏訪神社の神官と深い関係にある墓域ということができよう。

狐塚、峰の溝周辺は、その立地・地形からみて、今後、第Ⅰ期古墳、平安期の土壙墓の発見される可能性が高い。平安墓墳はさておき、フネ古墳を最古として、横穴式石室古墳出現（6世紀前半）までの、いわゆる第Ⅰ期古墳、フネ古墳型古墳の数が少ないように思う。したがって、この地帯と、フネ古墳・片山古墳の所在する。上社本宮西側丘陵上に発見される可能性が強い。

註1 藤森栄一 「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」考古学10-1 1939

註2 藤森栄一・宮坂光昭 「諏訪上社フネ古墳」考古学集刊3-1 1965

註3 岡角守一 「諏訪群湊村柄塚発見の六歌鏡」信濃4-7 1935

註4 戸沢光則 「岡谷市史」上巻。岡谷市 1973

- 〃 5 藤森・宮坂他「諏訪市大熊片山古墳」長野県考古学会誌 7 1969
- 〃 6 宮坂光昭「諏訪市一時坂古墳」日本考古学協会49回発表要旨 1983  
宮坂、高見俊樹、小林潔志「一時坂古墳」長野県史考古資料編南信 1983  
高見俊樹「一時坂遺跡」長野県埋文ニュース 2・3号 1983
- 〃 7 県教育委員会「本城遺跡」「中央道埋文報告、諏訪市その3」 1975
- 〃 8 宮坂光昭「方形周溝墓の研究と現状」中部高地の考古学 1 1978
- 〃 9 諏訪市教育委員会「一時坂」 1988
- 〃 10 宮坂光昭「古墳時代の茅野」「茅野市史」上巻 1986
- 〃 11 註10に同
- 〃 12 註10に同
- 〃 13 宮坂光昭「周溝墓と出現期古墳」「一時坂」諏訪市教育委員会 1988
- 〃 14 宮坂光昭「清水蘿古墳出土の鉄刀と鉄錐」諏訪市史紀要 2号 1990
- 〃 15 林茂樹「手長丘遺跡」県史考古資料編 1983
- 〃 16 藤森・註5
- 〃 17 宮坂光昭「古墳の変遷からみた古代族の動向」「日本原初考」2 1977
- 〃 18 註10に同
- 〃 19 宮坂光昭「諏訪市豊田小丸山古墳について」県考古学会誌21号 1975
- 〃 20 宮坂光昭「一時坂古墳と周溝墓に伴う土壤について」註13に同
- 〃 21 更埴市教育委員会「麻将草塚」 1983~1987
- 〃 22 原明芳他「吉田川西遺跡」諏訪長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3 1989

川口土器観察表[1]

標印番号	販路番号	通路名	種別	容形	形状	形態の特徴	調査の特徴	施主	施成	色調	その他
17-1	29-1	1号古墳	上縁器	高H.D	15.2	12.1	11.2	11.1	11.1	赤褐色	小柄色
17-2	29-2	1号古墳	土縁器	高H.D	14.5	12.2	11.2	11.2	11.2	赤褐色	小柄色
17-3	29-3	1号古墳	土縁器	高H.D	16.0	12.0	11.5	11.5	11.5	赤褐色	小柄色
17-4	29-4	1号古墳	上縁器	高H.C	16.2	12.2	11.8	11.8	11.8	赤褐色	小柄色
17-5	29-5	1号古墳	土縁器	高H.B	19.3	12.9	14.0	14.0	14.0	赤褐色	小柄色
17-6	29-6	1号古墳	上縁器	高H.B	18.9	12.7	13.3	13.3	13.3	赤褐色	小柄色
17-7	30-1	1号古墳	上縁器	高H.B	18.7	13.6	13.8	13.8	13.8	赤褐色	小柄色
17-8	30-2	1号古墳	上縁器	高H.B	19.0	13.7	13.6	13.6	13.6	赤褐色	小柄色
18-1	30-3	1号古墳	上縁器	垂B	9.0	—	—	—	—	赤褐色	小柄色
18-2	30-4	1号古墳	土縁器	垂A	—	—	—	—	—	赤褐色	小柄色

出土土器鉢寮表(2)

被験者名	内面側	外側	被験者名	内面側	外側	被験者の特徴	調査の特徴	施土	焼成	色調	その他
1号古墳 土師器	壺B	8.2	1号古墳 土師器	壺D	9.9	有底の口部をもつ、 2より6（H=4-6）に長い 丸底で錐形の脚部に直ぐる	1.内部外表面共に板状方向の無焼き 2.内部外表面共に縦に擦が長く直ぐる	砂粒を若干含 有	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	壺D	9.6	1号古墳 土師器	壺D	10.6	肩部を円錐形で、内部外表面方角の焼き 起き、脚部外表面方角の焼き	内部外表面共に脚部 を立ちがる	普通	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	壺D	10.6	1号古墳 土師器	壺D	11.3	口部や中腹部に「横焼き」が見 らる。丸底の小さい脚部を持つ	口部部外表面が立つ直ぐ る。脚部外表面が立ちがる。	砂粒	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	壺D	7.9	1号古墳 土師器	壺C	12.1	口部が扁平形で、内部外表面共に板状方角の無焼き 起き、脚部外表面に青文様が施かられ る。脚部内面は直角研磨	口部部外表面共に板状方角の無焼き 起き、脚部外表面に青文様が施かられ る。脚部内面は直角研磨	砂粒	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	壺C	15.2	1号古墳 土師器	壺B	12.0	小口部は後ろへ、下で上上がる形態を取 る。丸底に直角研磨	小口部は後ろへ、下で上上がる形態を取 る。丸底に直角研磨	砂粒を含 有	普通	洋褐色	
1号古墳 土師器	H.D	10.6	1号古墳 土師器	壺E	7.5	内側した脚部に小さな口縁焼きが見 る。丸底に直角研磨	内側した脚部に小さな口縁焼きが見 る。丸底に直角研磨	砂粒	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	H.D	8.4	1号古墳 土師器	壺E	7.3	やや圓柱的な脚部にややや内側な脚の高 い口縁部が立つ。丸底	やや圓柱的な脚部にややや内側な脚の高 い口縁部が立つ。丸底	砂粒を含 有	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	H.D	8.7	1号古墳 土師器	壺E	18.7	やや圓柱的な脚部に口縁部が長い。 丸底	やや圓柱的な脚部に口縁部が長い。 丸底	砂粒を含 有	良好	赤褐色	
1号古墳 土師器	H.D	19.6	1号古墳 土師器	壺E	19.7	丸底の脚部に背反する11棘窓が長い する	丸底の脚部に背反する11棘窓が長い する	砂粒を含 有	良好	赤褐色	

## 出土土器観察表(3)

辨別記号	目録記号	遺物名	縹列	器形	11位 底毛 器高	形態の特徴	調査の特徴	地土	地城	色調	その他
20-1	32-3	2号古墳 土師器	高H.C	16.5	12.0	11.2	外縁部は施設から内面弧部に大きく 広がる。外縁部との縫合は肩下に施設 脚部は「八」の字に広がった斜面脚 して大きく開く	外縁部内面、体部外面、脚部に縫合方向 の縫と斜状跡を 脚部は「八」の字に広がった斜面脚	良好、軽質	黄白褐色	
20-2	32-4	2号古墳 土師器	高H.C	16.6	12.0	11.1	外縁部は施設から内面弧部に大きく 広がる。外縁部との縫合は肩下に施設 脚部は「八」の字に広がった斜面脚 して大きく開く	外縁部内面、脚部外面に縫合方向の縫 文部の施設を 脚部は「八」の字に広がった斜面脚	良好、軽質	黄白褐色	
20-3	32-5	2号古墳 土師器	高H.C	16.1	11.4	11.5	外縁部は施設から内面弧部に大きく 広がる。外縁部との縫合は肩下に施設 脚部は「八」の字に広がった斜面脚 して大きく開く	外縁部内面、体部外面、脚部に縫合方向 の縫と斜状跡 脚部は「八」の字に広がった斜面脚	良好、軽質	黄白褐色	
20-4	32-6	2号古墳 土師器	高H.C	16.9	11.4	11.3	外縁部は施設から内面弧部に大きく 広がる。外縁部との縫合は肩下に施設 脚部は「八」の字に広がった斜面脚 して大きく開く	外縁部内面、脚部外面に縫合方向の縫 文部の施設を 脚部は「八」の字に広がった斜面脚	良好、軽質	黄白褐色	
20-5	32-1	2号古墳 1脚器	高H.A	21.2	15.5	14.3	外縁部は施設から脚を持つ正がった 脚と上部を持つ広がる。脚部 は「八」の字に広がった斜面脚 して大きく開く	外縁部外側は施設で、内側は中段及び底 面で3段に分かれて文部の縫きを 持す。脚部外側中間部は斜面脚で 外側は斜面と体部の間に脚を持つ 「八」の字に広がった斜面脚	良好、軽質	黄白褐色	
20-6		2号古墳 土師器	高H.F	15.9							
20-7		2号古墳 土師器	高H.C	15.4							
20-8		2号古墳 土師器	高H.P	18.1							
20-9		2号古墳 上脚器	高H.C	16.7							
21-1		2号古墳 土師器	高H.C	17.5							
21-2		2号古墳 上脚器	高H.C	16.1							
21-3		2号古墳 土师器	高H.C	15.4							
21-4	33-2	2号古墳 土師器	高H.C	11.6							

## 出土土器観察表(4)

検査No.	図版No.	通査名	種別	器形	口径	底径	脚高	断面	形態の特徴		調査の特徴	胎土	焼成	色調	その他
									側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く					
21-5	33-3	2号古墳	上脚器	高环C	12.0				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周縁力方向の強度を 脚部中間部強度弱り	良好	良好	黄褐色	
21-6	33-4	2号古墳	上脚器	高环F	11.3				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周縁毛孔で強度力方向の強度 脚部中間部強度弱り	良好	良好	黄褐色	
21-7	33-5	2号古墳	十脚器	高环F	10.5				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周縁毛孔で強度力方向の強度 側部外周及び内面強度力方向の強度	良好	良好	小褐色	
21-8		2号古墳	土脚器	高环F	11.9				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周及び内面強度力方向の強度	良好	良好	小褐色	
21-9	33-6	2号古墳	上脚器	高环F	12.2				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周及び内面強度力方向の強度	良好	良好	小褐色	
21-10	33-7	2号古墳	土脚器	高环F	10.4				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周縁弱りの強、強度方向の強 脚部内面強度弱りの強	良好	良好	小褐色	
21-11	33-8	2号古墳	十脚器	高环F	11.1				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周及び内面強度力方向の強度	良好	良好	黄褐色	
21-12		2号古墳	上脚器	高环F	11.2				側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部は「人」の字状に広がった後大 きく開く	側部外周強度弱りの強、強度方向の強度 脚部底面強度も弱、外周部強度弱	良好	良好	黄褐色	
21-13		2号古墳	土脚器	高环A	14.5				側部は段を持つ向外方に広がる、強 度は段は弱	側部は段を持つ向外方に広がる、強 度は段は弱	内外面とも断面強度の強度を 外周部強度弱りの強	良好	良好	小褐色	
21-14		2号古墳	上脚器	高环A	17.6				側部は段を持つ向外方に広がる、強 度は段は弱	側部は段を持つ向外方に広がる、強 度は段は弱	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	小褐色	
21-15		2号古墳	土脚器	1/4A	14.4				側部は小溝して立上がり口縁部に面 する	側部は小溝して立上がり口縁部に面 する	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	小褐色	
21-16		2号古墳	土脚器	1/4A	15.7				側部は小溝して立上がり口縁部に面 する	側部は小溝して立上がり口縁部に面 する	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	小褐色	
22-1		2号古墳	土脚器	坪A	13.8	4.0	5.9		底部から内燃気味に立上がり直立し て口縁部に至る	底部から内燃気味に立上がり直立し て口縁部に至る	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	小褐色	
22-2	34-1	2号古墳	上脚器	1/4A	13.8	5.5	5.5		底部から内燃気味に立上がり直立し て口縁部に至る	底部から内燃気味に立上がり直立し て口縁部に至る	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	小褐色	
22-3		2号古墳	土脚器	1/4A	13.5				内燃部に立上がり、直立して口縁 部に至る	内燃部に立上がり、直立して口縁 部に至る	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	小褐色	
22-4	34-2	2号古墳	十脚器	坪C	12.9				丸底の脚か? 内燃気味に立上がり 直立して口縁部に至る	丸底の脚か? 内燃気味に立上がり 直立して口縁部に至る	外周部強度弱りの強度を 外周部強度弱りの強度	良好	良好	白い小粒の 胎土を多く含む	白い小粒の 胎土を多く含む

出土土器觀察表(5)

場所 試験番号	通名	種別	器形	口径 径深	底深 底高	形态の特徴	調査の特徴	施土	焼成	色調	その他
22-5	2号古坟	須恵器	壺	16.5	-	底部をくがくと高くせざる。口輪部持つ輪形のものと見られる。口輪部と底盤の邊がやや傾く。内面は内斜傾し、端部は子透する。縁部は円弧である。	口輪部外側は削り出された形である。底盤は横方向の窪部をもつ。底盤は内側で斜めに傾いており、縁部は外側で斜めに傾いており、縁部は窓孔がある。	石質	良好、焼成失敗	外赤茶褐色、内面真褐色	クロホ水焼か?
22-6	34-3	2号古坟	土師器	壺C	12.9	6.1 (15.0)	16.5 やや腰半弓脚部に外反するい縁部が付く	口輪部外側は横方向の窪部をもつ。底盤は内側で斜めに傾いており、縁部は窓孔がある。	灰焼	本褐色	
22-7	34-4	2号古坟	土師器	壺D	9.0	-	周平な腹筋に、口部を立てる長い縁部が付く。均輪のとおりを立てる。	周部外側は削り出された形である。底盤は内側で斜めに傾いており、縁部は窓孔がある。	灰焼	本褐色	
22-8	34-5	2号古坟	土師器	壺E	9.6	16.9	16.3 底部をくがくと高くせざる。口輪部は直立する長い縁部が付く器形となるものと思われる。	底盤は直立する長い縁部が付く器形となるものと思われる。内面は腰半弓脚部の窪部を立てる。	良好	本褐色、内面 黒褐色	
22-9	2号古坟	土師器	壺B	21.1	-	底部はくがく、内面は腰半弓脚部である。	底盤は直立する長い縁部が付く。内面は腰半弓脚部の窪部を立てる。	良好	本褐色、内面 黒褐色		
23-1	34-6	2号古坟	須恵器	壺	19.6	8.8 30.1	やや上上げたとある形で、中段から内側にかけてある「腰筋」、縁部を持つて、底部から大きく開き、底盤を持つて、口部に直ぐ	口輪部は直立する長い縁部が付く。内面は腰半弓脚部の窪部を立てる。	良好	本褐色、自然 釉	
24-1	35-1	1号古墳	土師器	壺	10.1	5.4 3.0	底盤から内側に外方に広がる	底部が外側に向いていて、底盤は窓孔で直角に傾いており、口輪部から内側に外方に広がる。	普通	本白色	
24-2	35-2	1号古墳	土師器	壺	10.8	4.8 3.3	底盤から内側に外方に広がる。	底部が外側に向いていて、底盤は窓孔で直角に傾いており、口輪部から内側に外方に広がる。	普通	本白色	
24-3	35-3	1号古墳	土師器	壺	11.0	5.2 3.6	底盤から内側に外方に広がる。	底部が外側に向いていて、底盤は窓孔で直角に傾いており、口輪部から内側に外方に広がる。	普通	本白色	
24-4	35-4	1号古墳	土師器	壺	10.4	3.9	底盤から内側に外方に広がる。	底部が外側に向いていて、底盤は窓孔で直角に傾いており、口輪部から内側に外方に広がる。	普通	本白色	
24-5	35-5	1号古墳	土師器	高台付手B	12.5	8.2 5.8	範囲的に外方に広がる手筋に窓孔が付く	底部が外側に向いていて、底盤は窓孔で直角に傾いており、口輪部から内側に外方に広がる。	砂利含有、デ ラフ	黄白色	
24-6	35-6	1号古墳	土師器	高台付手C	14.1	7.0 4.3	底盤から内側に外方に広がる手筋に窓孔が付く	底部が外側に向いていて、底盤は窓孔で直角に傾いており、口輪部から内側に外方に広がる。	良好	本白色、釉 は白色変色	
24-7	1号土壙	土師器	高台付手A		6.7	底盤を欠く	底盤は手取り後で溶してある。底盤を含む有	普通	青色、内面無 色釉		

出十一.十器類觀察表(6)

種別No.	分類No.	道種名	種別	形態	17種 食肉	形態	調査の特徴		性別	年齢	その他
							前部	後部			
24.8		1号土鍋	土鍋型	甕	15.2	兩頭から口部がぐくの字形に広がる 内側背面に広がる体部が、背面が 突出し、体部中央に横割つ溝じと なる	口部は正面が壁が厚いので、外側 が傾いて、頭部外側に底方側が斜め で 体部外表面に横溝で	女性を含む	本褐色		
24.9 36-1	3号土鍋	土鍋型	甕	16.2	5.2 2.7	内側背面に広がる体部が、背面が 突出し、体部中央に横割つ溝じと なる	口部外表面に横溝で 5.2の跡を 含む	白褐色(ハグ 色)			
24-10 36-2	3号土鍋	土鍋型	甕	16.9	5.0 2.4	内側背面に広がる体部が、背面が 突出し、体部中央に横割つ溝じと なる	口部外表面に横溝で 5.0の跡を 含む	赤褐色			
24-11 36-3	3号土鍋	土鍋型	甕	18.8	5.4 2.9	内側背面に広がる体部が、背面が 突出し、体部中央に横割つ溝じと なる	口部外表面に横溝で 5.4の跡を 含む	赤褐色			
24-12 36-4	3号土鍋	土鍋型	甕	19.2	4.8 2.9	内側背面に広がる体部が、背面が 突出し、体部中央に横割つ溝じと なる	口部外表面に横溝で 4.8の跡を 含む	赤褐色			
24-13 36-5	3号土鍋	土鍋型	甕	19.7	5.3 2.4	内側背面に広がる体部が、背面が 突出し、体部中央に横割つ溝じと なる	口部外表面に横溝で 5.3の跡を 含む	赤褐色			
24-14	3号土鍋	土鍋型	甕	9.5	4.5 2.8	底部下側面で、外刃に広がる底部 と反曲している感じ	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	良好	赤褐色		
24-15 36-6	3号土鍋	土鍋型	小壺A	3.8		半圓の底盤から内側底盤に立上がり、 内側した外側反する。1回削る	底部外表面に横溝で、底部斜切り 底削	較弱	ハグ色	2木板を含 む金剛に刺繡	
25.1 37-1	2号土鍋	土鍋型	甕	10.8	4.6 3.7	底盤から直線的に外刃に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	赤褐色		
25.2 37-2	2号土鍋	土鍋型	甕	10.9	4.6 3.4	底盤から内側底盤に立上がりた後 方に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	赤褐色		
25.3 37-3	2号土鍋	土鍋型	甕	10.2	4.5 3.7	底盤から内側底盤に立上がりた後 方に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	赤褐色		
25-4 37-4	2号土鍋	土鍋型	甕	11.1	4.9 4.2	底盤から内側底盤に立上がりた後 方に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	黄褐色		
25-5 37-5	2号土鍋	土鍋型	甕	11.1	4.3 3.6	底盤から内側底盤に立上がりた後 方に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	赤褐色		
25.6 37-6	2号土鍋	土鍋型	甕	10.5	4.5 3.7	底盤から内側底盤に立上がりた後 方に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	赤褐色		
25.7 37-7	2号土鍋	土鍋型	甕	11.0	4.9 3.9	底盤から直線的に外刃に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	赤褐色		
25-8 37-8	2号土鍋	土鍋型	甕	10.5	5.0 3.8	底盤から内側底盤に立上がりた後 方に広がる	底部外表面に横溝で、底面斜切り 底削	やや軟質	黄褐色		

## 出土品観察表(7)

神社名	出所地	通称名	施主	形状	口径	底径	形态の特徴	調査の年份	前上	集成	色調	その他
25-9 38-1	2号土塼	土塼器	36	10.5	4.5	3.2	底盤から外見気泡に広がる 底盤から内側気泡に立上がり口外露 でやや外反する	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色	
25-10 38-2	2号土塼	土塼器	36	10.3	4.3	3.7	底盤から内側気泡に立上がり口外露 でやや外反する	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色	
25-11 38-3	2号土塼	土塼器	36	10.8	5.0	3.3	底盤から直線的に外方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	やや堅弱	赤褐色	
25-12 38-4	2号土塼	土塼器	36	11.2	4.8	3.9	底盤から内側気泡に立上がり後外 方に広がる	底盤から直線的に外方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色 (レ ヂ色)	
25-13 38-5	2号土塼	土塼器	36	10.9	4.9	3.7	底盤から内側気泡に立上がり後外 方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色	
25-14 38-6	2号土塼	土塼器	36	10.8	4.9	3.4	底盤から直線的に外方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色	
25-15 38-7	2号土塼	土塼器	36	10.9	4.4	3.7	底盤から内側気泡に立上がり後外 方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り替 り有	砂粒含石	やや堅弱	黄白色	
25-16 38-8	2号土塼	土塼器	36	10.5	4.5	3.7	底盤から直線的に外方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色 (レ ヂ色)	
25-17 39-1	2号土塼	土塼器	36	10.8	5.0	3.6	底盤から直線的に外方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色	
25-18 39-2	2号土塼	土塼器	36	11.3	4.8	3.6	底盤から直線的に外方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	やや堅弱	赤褐色	
25-19 39-3	2号土塼	土塼器	36	10.8	4.9	3.9	底盤から内側気泡に立上がり	体部が外斜方に施で、底面が下平指 頭によじかみがみられる。底面が 切り離れ無い點	砂粒含石	普通	黄白色	
25-20 39-4	2号土塼	土塼器	36	11.2	4.6	3.9	底盤から直線的に外方に広がる	底面が切り	砂粒含石	普通	黄白色で口縁 部分褐色	
25-21 39-5	2号土塼	土塼器	36	11.3	5.0	3.6	底盤から内側気泡に立上がり後外 方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	やや堅弱	赤褐色	
25-22 39-6	2号土塼	土塼器	36	11.0	5.0	3.8	底盤から内側気泡に立上がり。11号 縁でやや外反する	底面が切り落解い物で削。縁は扶 手無	砂粒含石	普通	黄白色	
25-23 39-7	2号土塼	土塼器	36	10.9	5.0	3.9	底盤から内側気泡に立上がり。口縁 がくちあわせ反する	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	赤褐色	
25-24 39-8	2号土塼	土塼器	36	10.7	4.5	3.7	底盤から直線的に外方に広がる	体部が外斜方に施で、底面が切り 替り有	砂粒含石	普通	黄白色で口縁 部分褐色	

出士器物(8)

## 出土・器類調査表(9)

件名	器物名	種別	断面	口径	底径	高さ	形態の特徴	形態の特徴	調査の特徴	施用状況	内面	地質	色調	その他
26-9	41-6 2号土器	灰陶器	灰陶	15.2	8.9	3.2	底部から口まで外方に大きくなっている。 高台部はやや内傾斜する。	底部は内傾する。高台部は 側で	施用状況	無	無	無地は灰白色。 施用部は淡黄色。 白線色。(淡)	無	無地は灰白色。 施用部は白色。 白線色。(淡)
26-10	41-7 2号土器	灰陶器	高台付壺	11.9	5.9	2.6	体部は内傾凹弧に大きく広がる。肩 部は内傾する。	施用部をより後退させて出し し	施用部	無	無	無地は灰白色。 施用部は白色。	無	無地は灰白色。 施用部は白色。
26-11	41-8 2号土器	灰陶器	高台付壺	12.3	7.0	2.2	体部は人字く外方に広がる高い高台 部を有する。	施用部は肩部は高く焼き、先端は鉋形圓 頂。高台部前面は施用部と接する。	施用部	無	無	無地は灰白色。 施用部は白色。	無	無地は灰白色。 施用部は白色。
26-12	42-1 2号土器	灰陶器	灰陶壺	10.0	8.0	15.6	11.1壺底は施用部から立ち立てる後広がり 部を持つて立上がり	施用部外側クロロ墨で、底部を切り落す。施用 部周囲と施用部と接する。	施用部	無	無	無地は灰白色。 施用部は白色。	無	無地は灰白色。 施用部は白色。
26-13	42-2 2号土器	灰陶器	灰陶壺	13.0	9.2	24.0	口縁部は施用部から立ち立てる後広がり 部を持つて立上がり	施用部周囲を割削りして施用部と接する。	施用部	良好	良好	無地は灰白色。 施用部は白色。 中は白粉色。 背部は桃色。	良好	無地は灰白色。 施用部は白色。 中は白粉色。 背部は桃色。

遺跡周辺の航空写真  
中央左に位置する川端先  
端の丘陵上が氣候遺跡。  
左の扇状地には諏訪神社  
前宮が鎮座する。中央の  
扇状地は高部である。





1. 狐塚遺跡の丘陵 背後の山は守屋山



2. 高部と守屋山塊の景観 中央は相本社



1. 遺跡近景



2. 遺跡近景



1. 遺跡からみた諏訪盆地の東南部



2. 遺跡からみた八ヶ岳山麓



1. 第1号墳からみた「峰嵩の木」

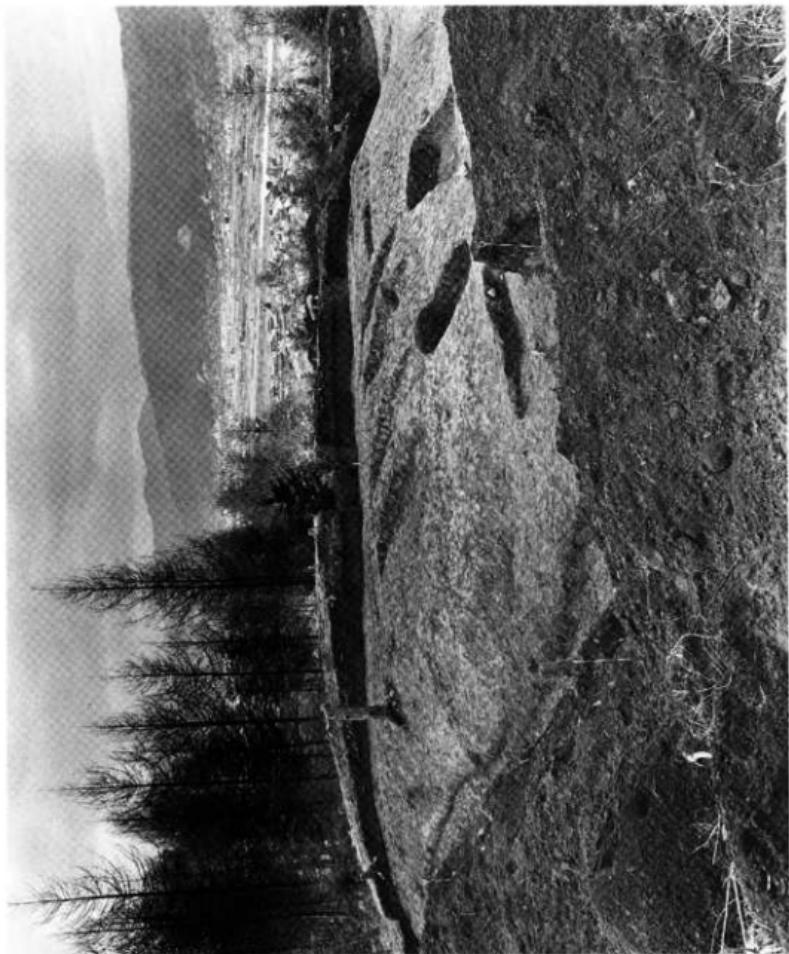


2. 峰嵩付近からみた第1号墳

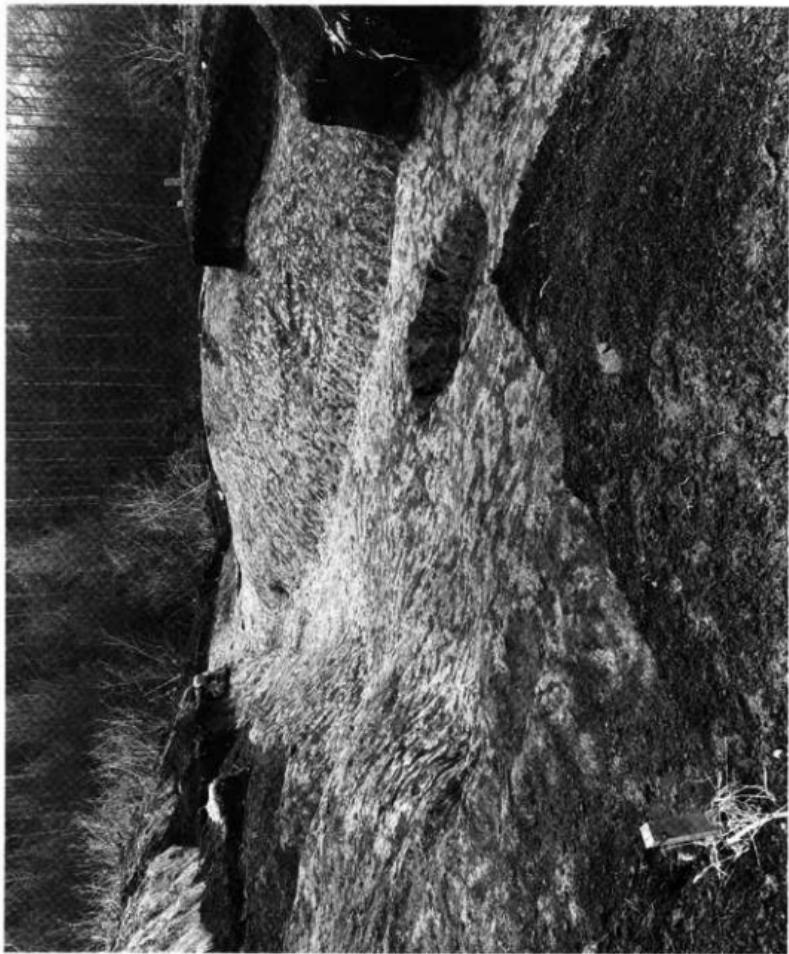


第1号墳全貌（東側から）

第1号墳全景  
(南西側から)



第1号墳全貌  
(東北側から)





1. 第1号墳墳丘南東部



2. 第1号墳墳丘東部



1. 第1号墳墳丘南西部と周溝内の第1号土坑



2. 第1号墳墳丘西部と段状遺構



1. 段状遺構（北から）



2. 段状遺構南端部



1. 第1号墳A～E - 105列の状況



2. 第1号墳北西コーナー部のトレンチの状況



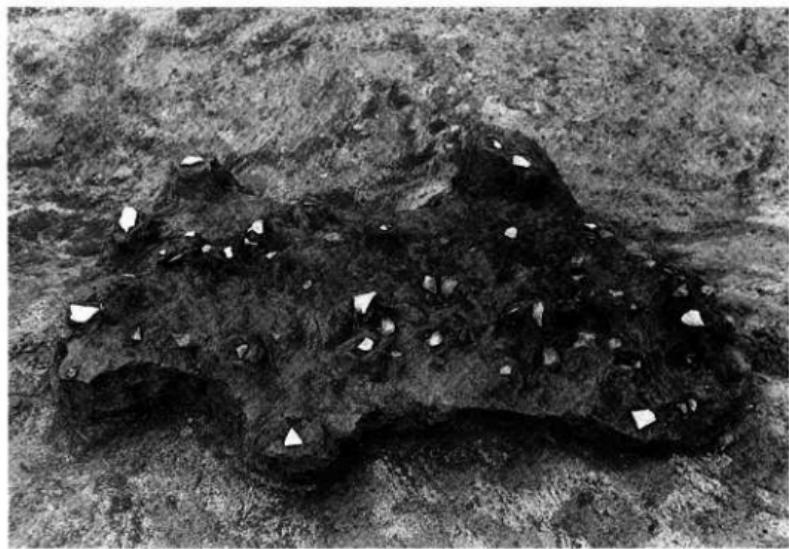
1. 第1号墳F-108~110北壁セクションの状況



2. 第1号墳西側基部とF-110・111北壁セクションの状況



1. 第1号墳東南側周溝内の遺物出土状態



2. 周溝内の遺物出土状態



1. 周溝内の遺物出土状態



2. 周溝内の遺物出土状態

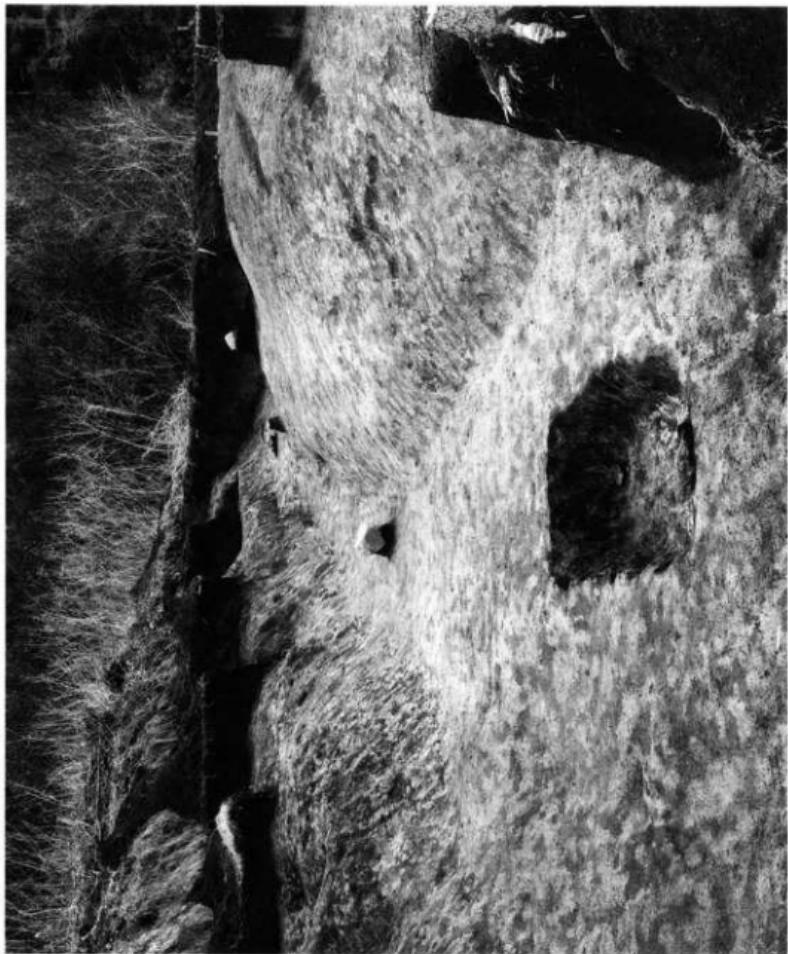


1. 周溝内の遺物出土状態



2. 周溝内の遺物出土状態

第1号墳の周溝と  
第1号土塁(北から)





1. 第1号土壤発掘状況（西から）



2. 第1号土壤（東から）

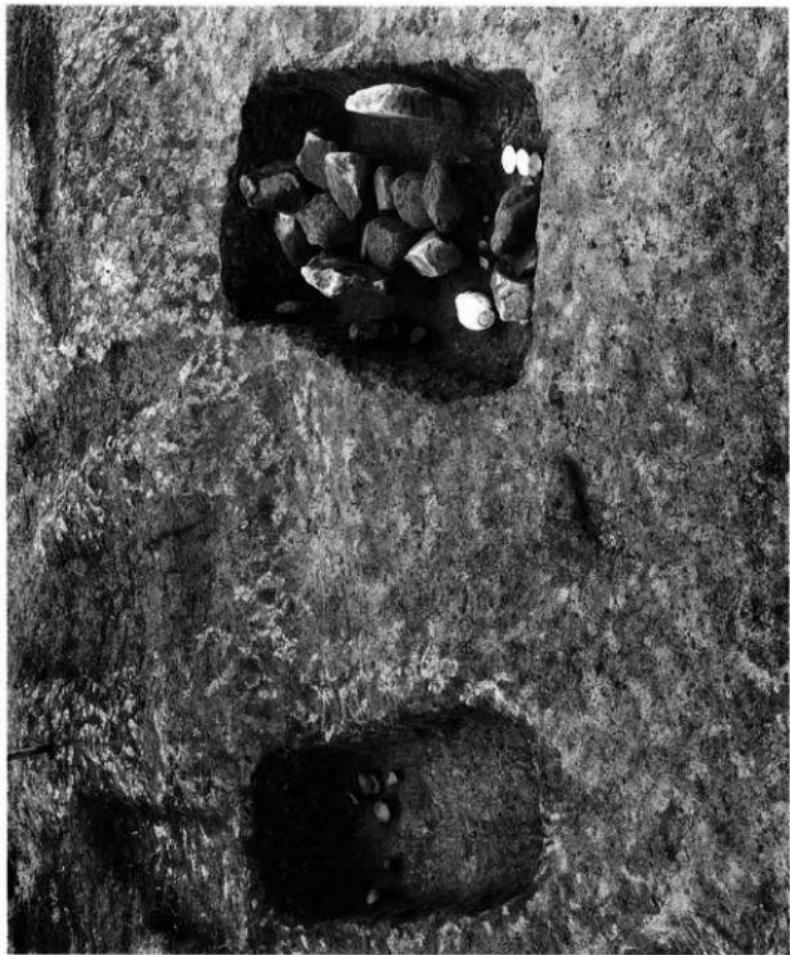


1. 第1号土壙北壁側の一括土器

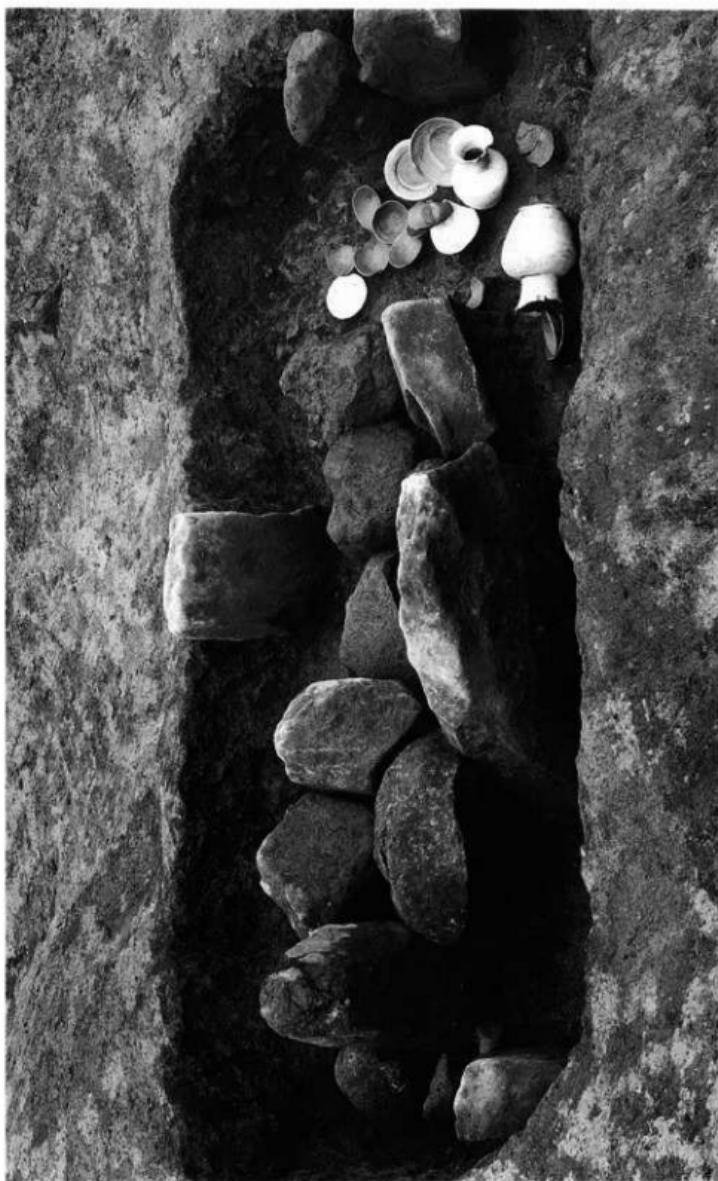


2. 第1号土壙南壁下の破片

第2号(右)・3号(左)  
土壙(雨から)



第2号土塙（西から）





1. 第2号土壙（西から）



2. 第2号土壙（南から）



1. 第2号土壙（東から）



2. 第2号土壙（北から）

第2号土壤遺物  
出土状態





1. 第2号土塘遗物出土状态



2. 第2号土塘遗物出土状态



3. 第2号土塘遗物出土状态



1. 第2号土壙上面の礫の状態



2. 第2号土壙プランの全景と遺物の出土状態



1. 第2号土壤小壺の出土状態



2. 第2号土壤板状炭化材出土状態



1. 第3号土壙（西から）



2. 第3号土壙遺物出土状態



1. 第17図 1



2. 第17図 2



3. 第17図 3



4. 第17図 4



5. 第17図 5



6. 第17図 6



1. 第17圖 7



2. 第17圖 8



3. 第18圖 1



4. 第18圖 2



5. 第18圖 4



6. 第18圖 5



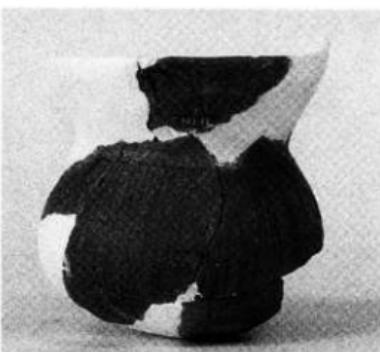
1. 第19圖 1



2. 第19圖 2



3. 第19圖 3



4. 第19圖 4



5. 第19圖 5



6. 第19圖 6



1. 第18圖 6



2. 第18圖 7



3. 第20圖 1



4. 第20圖 2



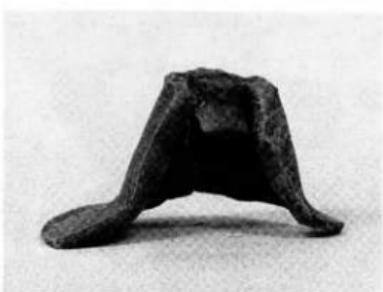
5. 第20圖 3



6. 第20圖 4



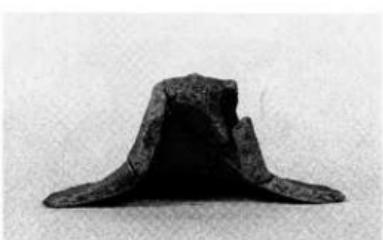
1. 第20圖 5



2. 第21圖 4



3. 第21圖 5



4. 第21圖 6



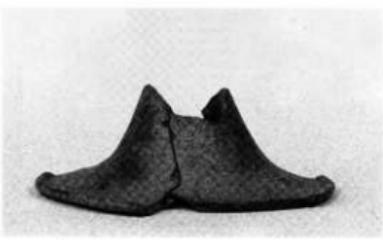
5. 第21圖 7



6. 第21圖 9



7. 第21圖 10



8. 第21圖 11



1. 第22圖 2



2. 第22圖 4



3. 第22圖 6



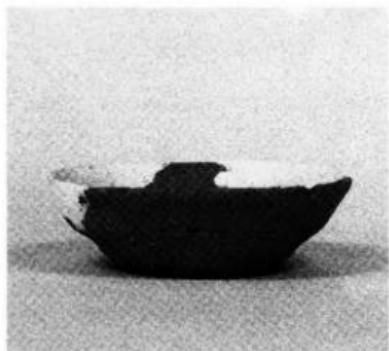
4. 第22圖 7



5. 第22圖 8



6. 第23圖 1



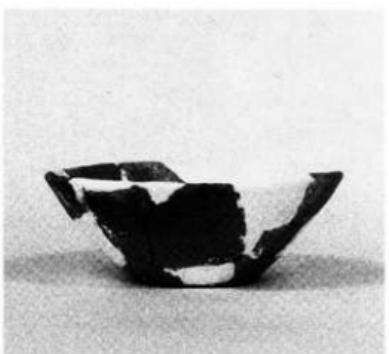
1. 第24図 1



2. 第24図 2



3. 第24図 3



4. 第24図 4



5. 第24図 5



6. 第24図 6



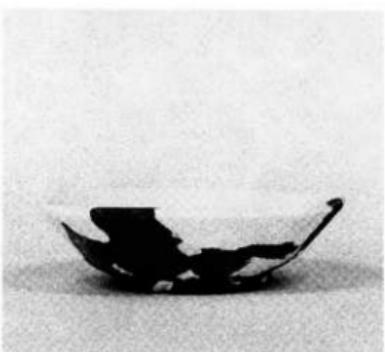
1. 第24図9



2. 第24図10



3. 第24図11



4. 第24図12



5. 第24図13



6. 第24図15



1. 第25圖 1



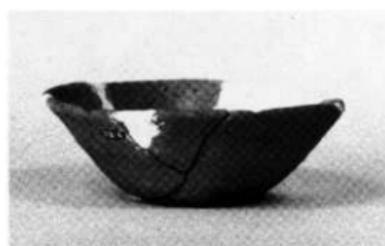
2. 第25圖 2



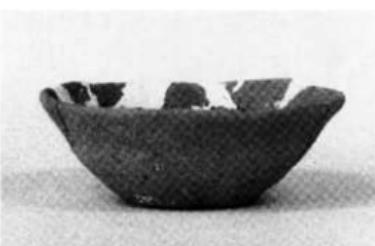
3. 第25圖 3



4. 第25圖 4



5. 第25圖 5



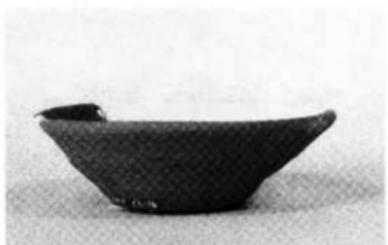
6. 第25圖 6



7. 第25圖 7



8. 第25圖 8



1. 第25圖9



2. 第25圖10



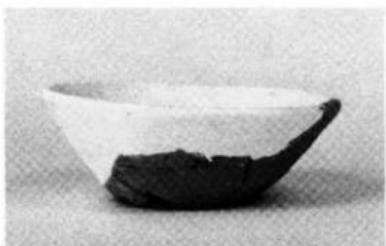
3. 第25圖11



4. 第25圖12



5. 第25圖13



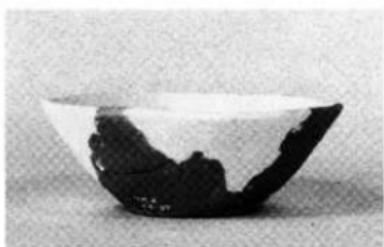
6. 第25圖14



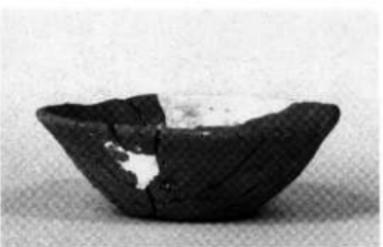
7. 第25圖15



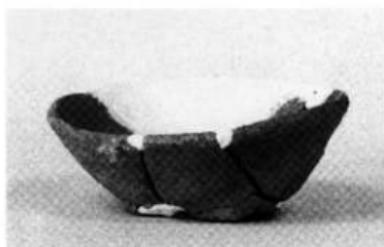
8. 第25圖16



1. 第25圖17



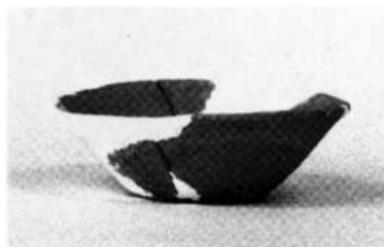
2. 第25圖18



3. 第25圖19



4. 第25圖20



5. 第25圖21



6. 第25圖22



7. 第25圖23



8. 第25圖24



1. 第25圖25



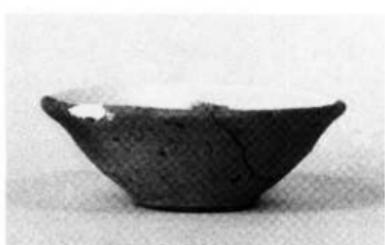
2. 第25圖26



3. 第25圖27



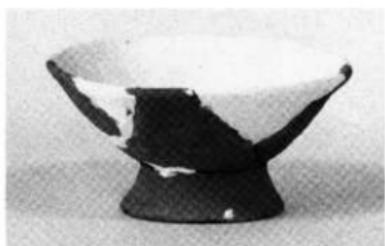
4. 第25圖28



5. 第25圖29



6. 第25圖30



7. 第26圖1



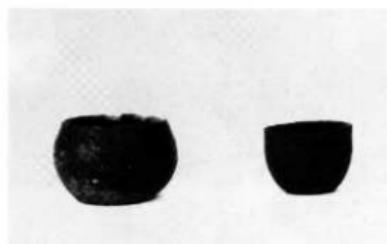
8. 第26圖2



1. 第26圖3



2. 第26圖4



3. 第26圖5・6



4. 第26圖7



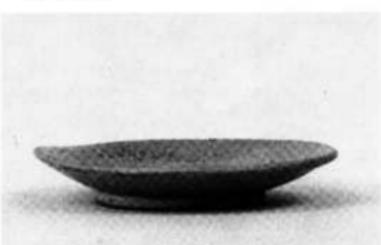
5. 第26圖8



6. 第26圖9



7. 第26圖10



8. 第26圖11



1. 第26図12



2. 第26図13



3. 雪の中での実測



1. 発掘調査参加者



2. 発掘調査風景

---

## 狐塚遺跡

——前宮公園建設工事に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

平成2年3月25日 印刷  
平成2年3月31日 発行

福集行 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号  
茅野市教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---



